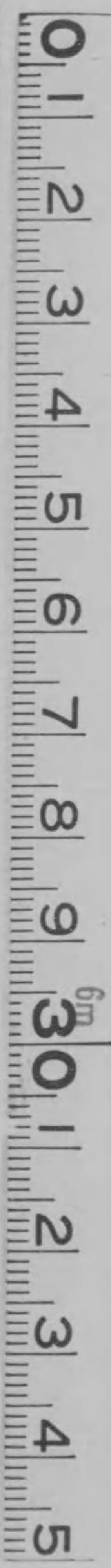




393
581



始



21562

10119

ち

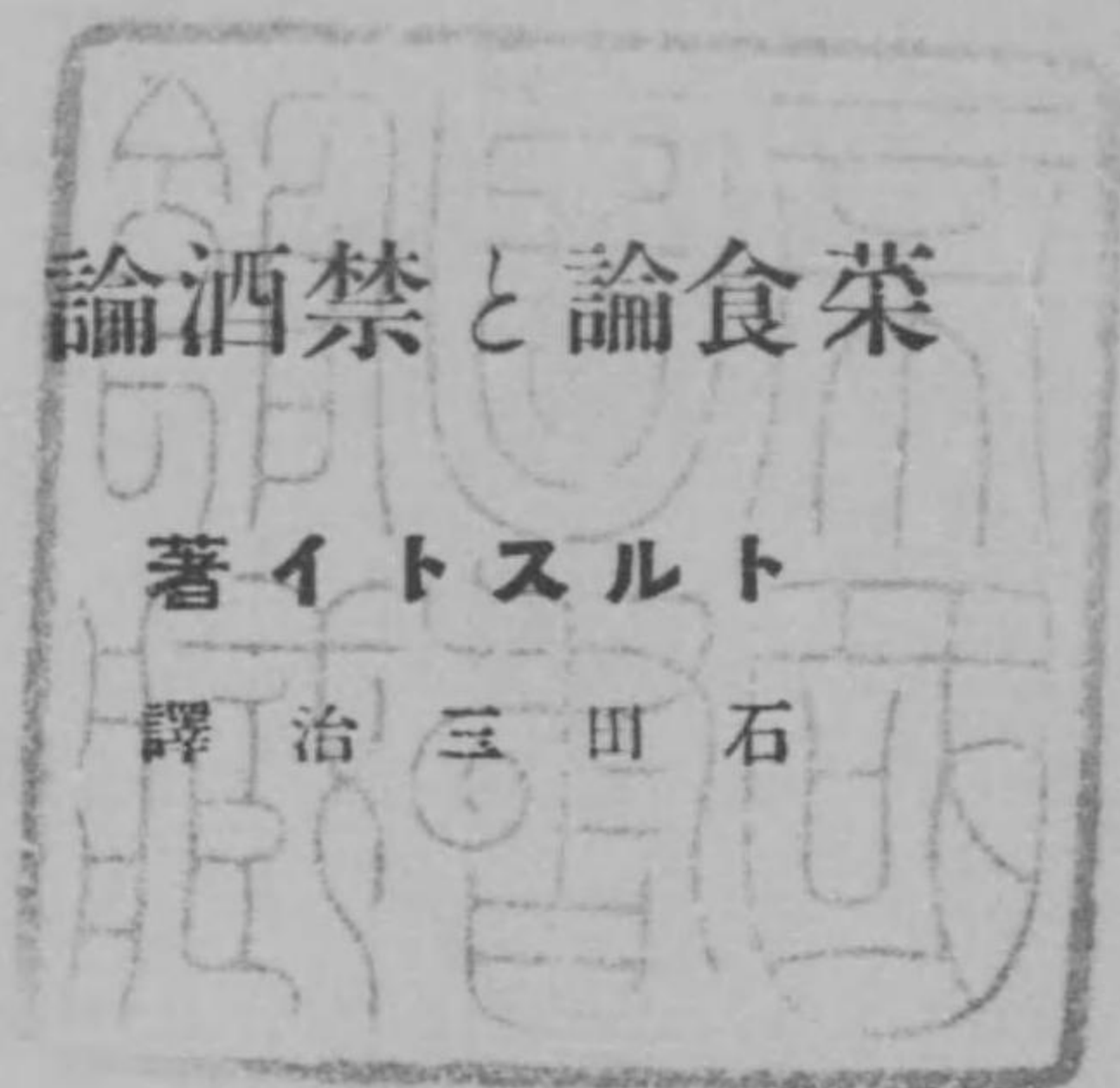


著 イトスルト
 譯 治 三 田 石

菜食論
 と
 禁酒論

社 秋 春

393-581



社 秋 春



トルストイの菜食實行と言へば、知らぬ者のない程著名な事實だが、如何なる根據、如何なる主張の上に立つてのことであるかは、明確に了知してゐる人が殆んどない。これは不思議にもあの筆まめなお爺さんが、このことに關してのみは筆を控へてゐるのによらうであらう。いろんな論文に極めて稀に散點してゐる以外、纏つて意見を述べたものと言つてはこゝに收めた『第一階段』のみである。この意味から等身に餘るトルストイの著作中、本篇は最も異彩あるものと言へる。

附録の『人々は何故に自らを麻酔せしむるや』は、彼の禁酒禁煙論である。

この兩篇を通じてみて何より第一に心を打たれるのは、かうしたことに対してまで良心に徹底せしめて、究極まで押しつめて考へなければ止まない彼の内生活のたくましさである。事は一見些末に見ゆるが、何しろ吾等が日常寸刻も

忽せにするべからざる問題だから、彼が主張に賛成すると反対するとに拘はらず、これは萬人に興味ある問題を提供するであらう。

序に言つておくが『第一階段』の紹介は早く民友社發行徳富健次郎氏著『トルストイ』の中に見える。あれには徳富蘇峰氏のヤースナヤボリヤーナ訪問記も中程に併せ收めてあつたが、トルストイ家の食卓を記叙する項下に、翁が菜食を取ることが目に見えるやうに描いてあつた。

大正十二年十一月

内	容
第一階段 (菜食論).....	二
何故人々は自らを魔酔せしめるか (禁酒論).....	五

菜食論と禁酒論



石田三治譯

第一階級

人が若し仕事の眞似事をするのでなく、實際そのやつてゐる事を完成する爲めに働くといふのなら、須くその行動は該事業の性質に依て規定されてゐる筈の一定の順序といふものを順々に踐んで行かなければならぬ。その人にして若しも仕事の性質上先にしなければならぬものを後廻しにしたり、乃至は或肝腎な事を全然無視したりするやうでは、確かにそれは眞劍に仕事をしてゐるのではなくて、仕事の見せかけをやつてゐるだけのことである。で此法則は、その仕事の肉體的なると否との別を問はず通用するものである。恰も人が、ほんとうに麵麩を焼かうと思ふなら、先づ第一に粉を捏ね廻し蒸焼籠を暖め灰拂ひをするといふやうな事を抜きにしては能きないと同様に、ほんとうに善き世渡りをしやうと思ふなら、それに必要な品性徳能の到達に一定の順序を通つて行かなければ能きないのである。

正しい生涯といふことに就いては、特に此法則は重要なものである。といふのは麵麩をこしらへるといふやうな肉體的な仕事の場合に於いては、その人が眞劍にその事に従事したか乃至はたゞ眞似事

に過ぎないかといふことは結果で直ぐ知れることであるが、善良な世渡りといふことに就いては這般の立證は不可能なことだからである。若しも茲に人あつて捏粉を捏ねず籠を暖めずに、恰も芝居でやるやうにして麵麩を作る眞似をしたら、麵麩が無いといふその結果からして、それはもうほんの見せかけに過ぎなかつたんだといふ證據になる。が併し或人が茲で善生涯を送るやうに見せかける時、彼が眞劍にやつてゐるのではない、たゞもう眞似事ばかりやつてゐるのだといふさう云つたやうな目に見える徴を吾々は持つわけには行かない。何故となれば、善生涯の結果といふものはその周囲の人達にいつもはつきりと明かに現れないのみか、時には彼等に有害のやうにすら見えるからである。一個人の行動に關する敬意とか、乃至はその同時代人に依ての該行動の利益及び悅樂承認といふやうなことは、畢竟するにその生涯の眞に善なる所以を證明して呉れるものでは無いのである。

それ故善生涯の單なる見かけ倒しからほんとの所を判然とさせる爲には、必須的な品性徳能を獲得するに要するその正しい順序に依て示された徴が特に重視せらるべきものであつて、この徴こそ吾々をして他人が善の爲めに努力してゐるその眞剣さを發見させ得る爲めにといふよりも寧ろ、吾々己自の衷に此眞剣性を檢査する爲めに重要なものである。といふのは此點で吾々は、他人を欺くよりも更に吾々自身を欺瞞し易いからである。

で諸徳を成就するに正確な系統的順序といふことは、善生涯の方へ進み行くのに不可欠的條件なので、必然に古來人道の師は、常にその成就に一定不變の順序を説き教へたものである。

總ての徳教は、支那賢哲の教がそれを持つが如き地上から天に達する梯子を組み立てる。がその梯

子たるや、最下段から出發してのみ上昇し得る者である。波羅門教、佛教、儒教に於けるが如く、希臘聖哲の教に於いても亦同様とその段階が固定され、しかもその最上階段が先づ第一に下方のものを抜きにしては到達されないのである。宗教非宗教を問はず人類の道德の師は、正しい生活に無くてならぬものを仕遂けるのは一定の順序の必要を経ることを認容する。で此順序に就いての必要なることは諸般の事物そのもの、精髓にあることとして、それは當り前から云へば誰にでも認められなければならないやうに思はれる。

然るに茲に奇異なのは、「教會基督教」の傳播した時以來、此必須的順序の意識が段々と消え去つて來て、今や單に禁慾家及び修道僧の間にのみ保留されてゐることである。彼世俗的基督者間には、高級の諸徳は管にその據て來るべき下級のそれが無くても達せられるといふのみならず、非常な罪禍を同伴としてさへ達せられるといふことは勿論の事柄になつてゐる。従つて善生涯を形成するといふことの觀念は、今日世俗一般多數者の心に甚しき混亂の状態を齎し來つたのである。

二

現代に於いて人々は、善生涯を導く爲めに人の要する品性徳能上の順序に關する自覺を失つてゐるその結果善生涯をば何が組み立てるのかといふ肝腎要の觀念を失つてゐる。つまり此のやうなやり方で以てさうなつたのだと私は思ふ。

基督教が異教と入れ代つた時、異教のをしへに數等優る道德的要求を高調した。そして是と同時に

(異教の道德の場合もさうだが) 諸徳完成に缺くべからざる順序を必然的に定めたのである。つまりそれは正しい生涯に到達すること必條といふ保證付きの階級なのである。

プラト一の諸徳は、自制に始まり、勇氣と智慧を経て正義に至り、基督教は已を棄つるに始まり、獻身を経て神の意志即ち愛にまで上る。

基督教を眞劍に受け容れ、正しい基督者の生活をしやうといそしんだ者は、斯うして基督教を會得したもので、彼等は常にその諸慾を拋棄することに依て正しく生活することをはじめたのである。して此諸慾拋棄の中には異端の自制も含まれてゐる。

と云つて此事に關して基督教が異端教の教と譯もなく共鳴してゐたのだといふやうに想はしめてはならぬ。私をして基督教をその高き所より、異教の水平面に墮せしむるのかといふ詰責より免れしめよ。這般の詰責は惟ふによくはない。と云ふのは不省基督教は世界最高の教として知られてゐるとはもとより認むる所、異教から全く種類を異にしたものとしても認めてゐるのである。基督者の教が異端教の教に入れ代つたのは、たゞ單に前者が後者よりも、種類を異にしてをり、且つ數等優つてゐるからである。が然し兩教共に人々を眞理と善とに向つて指導する點に於いて一致する。そして常にそれが等しいだけに、それらに達する道もまた等しい。でその道の第一歩が基督者の教にも異端者のそれにも避くべからざる所以がそこにある。

兩者の善に關する教の相違は、實に次の一點に存するのである。即ち異教の教にあつては結局人間が完成されるものとしての教であり、基督教のそれは何處まで行つても未完成なものとしての教な

のである。如何なる異教、之を云ひ換へれば基督教にあらざる如何なる教派での教でも、人々の前に全き完成の手本を置く。けれども基督者の教に至つては彼等の前に置くものは、未完成の手本なのである。例せば、プラトンの完全の手本として正義を置くが、基督の手本は愛の未完成なのである。「天にいます汝等の父の全きが如く全かれ。」此處に違がある。で此違つた異教と基督教の關係から各違つた道徳的段階を將來する譯合なのである。で前者によれば最高の諸徳成就は可能なことであり、そこへ到達する一段々々は聽てその比較の能ざる功徳を持ち來たし、一段高ければ功徳もそれだけ大きいといふやうになつた。だから異教徒の觀方からすれば、人々は道徳的と不道徳的とに別けられる。乃至はまたその不道徳の程度も論ぜられる。然るに基督教によるならば、それが未完成の理想を立てるゆえに、此種の分類は不可能になる。其處には道徳的標準に高低のありえやう道理はない。で人間の完全を無限の彼方に示す基督教に於いては、各歩各段無限の理想に對する關係は等しいものである。

異教徒間にあつては、人に依て到達された徳フアルテそのものの平面が、その人の功徳イグナを構成する。基督教に於いては、功徳の構成はたゞ彼最高理想に到達することの經過中に存し、その到達に關する遲速に於いてのみある。異教徒的見方を以てすれば、理性の徳を把持する人は、その徳に於いて缺如してゐる人よりは道徳的に高いのであつて、之に加ふるに勇氣を持てる人は更に高くなり、更に此上に正義を加ふるの士は道徳的に更に一段と高いものとして立つた。けれども基督者たるものは彼より此が道徳的に高いとが低いとが見做される譯にはいかないのである。基督者間で若しも這般の比較級が用

ゐらるゝならば、それはたゞ何時何日に達せようなものだといふやうな所を考へずに、只管に彼無限の完全に向ひて躍進するその速力に應じて云はれるのである。其處でバリサイ宗徒のいつも同じ調子の正しいといふことは、十字架上悔い改めた盜人の進み方よりは悪いのである。

先づまあ兩者の教の相違は斯ういふ次第である。従つて徳の諸目、のたとへば自制及び勇氣といふやうなものは、異端教に於いては功徳を構成するが、基督教に於いては何れもそれを造り上げないのである。此點に兩者の教が異なるのである。が併し、どの道徳段階から上ること無くして、品性徳目の成就は難く、彼完全への躍進は六ヶ敷いといふ、その事實に關しては、異端教も基督教も變りはない此處には兩者に差別があり得るものでない。

異教徒同様、基督者は始めからその身を完全にすることを以てはじめなければならない。たとへば異教徒が彼自制といつたやうなものでそれを始めるやうに、丁度これは階段の高飛を希ふ者が、最初の段階を踏み出すのを避ける譯にはいかないやうなものだ。唯一の相違は異端者には自制そのものが品性も構成するが、基督者にはそれはたゞ單に彼の完全に向つての大願望の缺くべからざる條件に過ぎない所の克己といふものゝ一部なのである。だから、眞の基督教の表示は、異端教で示され遂行された道程と同じものを迎へないといふことにある。

然し乍ら、必ずしも萬人いづれも基督教を解して天なる父の全きが如き域に到達する大願望として考へてはならないのである。多くの人は救の教として之を認めた。たとへばカトリックと希臘正教とに従へば、教會を通じて傳へられた恩寵に依て罪の赦しが得られるとか、又は新教徒、革新教會

(譯者曰、普通此語によつて呼ばれてゐる派はカルヴィ) カルヴィニスト等に従へば、基督の贖罪に依て人は救はれるとか、乃至は他の派に依て云はるゝやうに、兩方を混ぜ合せたやうなもので救を説くとかするのである。

そして此教儀こそ、基督教の徳教に關する人々の眞摯と眞面目とを破壊したものである。假令此種の信仰の代表者等が是等の救の意味は決して彼正しも生涯に對する渴仰と相容れぬものでは無い否それのは反對に却てその渴仰そのものに役立つものだ、如何ほど説きたてやうとも、尙ほ且つ次の事は如何ともし難いのである。即ち、一定の所論からは必然に一定の演釋が従ふもので、如何なる議論と雖若し一度其處らのその演釋が流れ出るのだといふその所論を認容せんか、その人々は最早や是等の演釋をなす事から免るゝ譯にはいかないのである。其處で假りに一人の人が教會に依て傳へられた恩寵のおかげで救はれることが能きるとか、乃至は基督の贖罪のおかげで救はれることが能きるとかいふことを信するならば、勢、彼には斯うなるのが自然なはなしである。即ち正しき生涯を送る爲めには、彼自の努力は不要なことになる況んや彼が自力で彼を更に善き者にしやうとする希望さへ罪だと告げられたら尙ほ更らの事である。従つて彼が罪とその報いから免れることの能きる方法として、己の力を頼まない他の方法があると信するならば、最早やその人は、自力の外の方法を知らぬ人の如き精力と、劍とを同じ程度に出して努力することは到底能きるものではないのである。若し夫れ、完全なる眞面目を以て奪鬪をしないと、個人的努力以外の他の方法を知つて之に頼むとかするならば、必ずやその人は善生涯に必要な善品性の到達に要する、他物を以て代ふべからざる順序を

無視するに到るであらう。そして實に此事が、基督教を口にする多數者に見られる現象なのである。

三

自力といふものが、人の精神的完全に到達する事には不必要なものだと云ひ、その獲得に他の方法があると説く教儀は、善生涯に生きんとする努力の弛緩を生じ、這般の生活に不可欠の連鎖事項に關する無視怠慢を産む。

基督教を奉ずる大多數の者は、たゞそれを皮相的に受納れ、異教的徳目の要求から免れる爲めに、異端教に入れ換つて現れた基督教の冥加を有り難がつた。然り、最早や基督教には彼徳目は要らないのである。斯くして彼等はその動物性との争鬪から免れる爲めに、這般の境地を喜んだ。

と同様な事が、教會の教を信じなくなつた人達にも起つた。彼等は前述の信者と同じであつて、たゞ違ふのは、教會に據て乃至は贖罪に由て賜はる所の恩寵の代りに、多數者に依て認容された想像上の善行、たとへば科學だとか藝術だとか乃至は人道だとかいふものに勤務するといふことである。そして彼等は此想像上の善行の名の許に、善生涯に必要な品性に對する連續的な成就から免れ、恰も舞臺上の人々の如く善生涯を送る見せかけのみを以て満足するに到つたのである。

斯くの如き眞の意味での基督教を抱懷せず異端教から更に墮落した者共は、克己から別物としての神及び人に對する愛を説き、自制抜き正義といふものを教へはじめたのである。云はゞ、彼等の説いたものは、下段にある諸徳を抜きにし、高い諸徳を説いたのである。つまり是は諸徳そのものを

説いたんではなくて、そのまがひを説いたんである。

或者は己を棄つるといふ事や又は他の徳性を抜きにして神や人に對する愛を説き、克己なしで人道の奉仕といふことを教へる。で此教の如き、人を高い道德の域にまで導く振りをして、その實、道德の最根本的要求からして彼を放免する事に依てその獸性を勵ますに於いて、信者からも非信者からも共にその教が容易に受容れられるに至つた譯である。(さう、道德の最根本的要求と茲で云つたが、それは、ずつと前に異教徒に依て承認せられ、眞の基督教に依て拒まれないのみか、却て強められたものなのである。)

曩日、社會主義に關する法王の教書(モルドの註に曰く、法王レオナ三世の發したる回狀をいふ)が公表されたのを見ると、私有財産の惡に關する該主義者の見解に對し、見せかけの辯駁をやつた後に、それが露骨に云はれてゐた。曰く『何人と雖、その人並びにその一家の必要とする所のものに應ずる諸物を、他人に分け與ふべしと命せらるべきものにあらず。然り、生活上その舊來の状態を適當に維持すべく當然要すべき物をだに之を分與すべしと命するを得ず。何となれば、何人も不適當には生活するの要なければなり。』(此一節は聖トーマス・アクイナスの *Nulius enim inoonvenienter vivere debet* から取つてゐる) (されど、若しその必要にして快く滿されんか)乃至は人その所を快く得んか、それより超過する物は是を貧者に施すを義務とすべし。殘餘こそ施物なれ。』

斯くの如く今かの廣汎なる領域を有する教會の長が宣言するのである。して又既往に於いても自力に依ての救を不滿意思ふ總ての教會教師がしかく説いたのである。それから此汝の欲せざるものよみ

を隣人に施せと命する利己の教と相俟つて、彼等はまた愛を説き感激を以て彼愛に關する哥林多前書第十三章の保羅の有名な言葉を呼出すのである。

福音書には克己の要求が滿ちるにも係らず、またその克己が基督者の完成に到達する第一の條件だといふ示顯で溢れてゐるにも係らず、露骨に云へば『彼十字架を負はざるものは云々』とか『父母を捨てざる者は云々』とか『その生命を失はざる者は云々』とかいふはつきりした言明のあるにも係らず、人々はその慣れたものを抛棄せず乃至は自分に適ふと思ひたいものすらをも抛棄せずに人を愛することが能きると自らも思ひ人にもさう思はせてゐる。

教會の人々はさう語る。がさて茲に嘗に教會のみならず基督者の教に關してそれに反對を稱へる人達(自由思想家等)がまた是と同じやうな事を考へたり話したり書いたり行つたりしてゐるのである。是等の人々はその欲求を少しも減殺する事なしに、またはその快樂を抑壓することなしに、彼等は人類を救ふことが能きる即ち善生涯を送り得ると自らも考へ人にもさう思はせてゐる。

人々は徳を完成するのに異教の道行を捨て、顧みなかつた。かその眞の意味での基督者の教をも消滅することをせず、彼等は基督者の執るべき道行をも取らなかつた。そして全く指導者なしに置かれたのである。

四

その昔、基督者の教の無かつた時代、ソクラテスをはじめとして人生の師は總て、人生の第一徳と

して自制(*ἐγκράτεια* 又は *σωφροσύνη*)を認めた。そして又總ての徳は此ものを以てはじまり此徳を経過しなければならぬものだと思はれてゐた。で此事は確實であつた。即ち自制を持たなかつた人が諸慾の數々を限りなく起し、それに全く身を任ねてしまつた人は善生涯を送り得なかつたといふ事である。でまた斯ういふことも明かであつた。人が廉潔正義の如きをさへ——寛大乃至愛に就ては云はずもあれ——語る其前に、彼は自身を先づ制することを學ばねばならぬといふことである。所が今吾々の考へでは、そんな事はまるで要のないものである。で吾々は斯う思ひ込んでゐる。即ち諸慾を頂點まで發展させた者は吾々の社會で幅を利かし、人を囚へる無益な多くの習慣を満足させずには生活の能きない人間は、それで以てまた道徳的な善生涯をも送り得ると斯う思つてゐる。ところが低きは功利主義高きは正義を要求する異教主義更に高くしては愛を要求する基督教の立場からといふ場合に孰れの見地からする場合でも、人が彼自身の快樂の爲めに他の人々の努力時にそれは痛はしき勞働なのだ、それを用ゐるのは悪い行爲だといふことは解り切つた事だ。(その快樂たるや止す氣になれば止せるのだ。だから若しも善生涯を送らうとするなら此そもくの第一の惡を犯さんやうにそれを先づ止めることが肝腎である。

功利主義の立場から見れば斯かる行爲は惡である。といふのは彼が他の人々を彼の爲めに働かせるやうに強要する限り、彼は常に不安定の地位に居る。若し夫れ彼がその諸々の慾求を満足することに慣れてしまひ、それら諸慾に全く囚へられる段になると、一方彼の爲めにせつせと働く人々が憎惡と嫉視とを以てその仕事をするやうになり、たゞもうそんな仕事をしないでいゝやうに自由になるそ

の機會を待つといふことになるのである。従つて這般の人は常に、その足るを知らしめぬ慾求を創造し出す根強く種付けられた舊慣と共に人々より捨てられるといふ危険裡にある譯である。

また彼正義派の見地よりするも、斯かる行爲は悪いのである。といふのは自分の快樂の爲めに、己に快樂を施して呉れる當の勞働者にその百分の一の快樂も與へずに之を使役することはよくないからである。

更にまた基督教の愛の立場から見ても云ふならば、他の人々を愛する人は、彼等からその努力の果實を己が快樂の爲めに取るよりも、寧ろ彼等に彼自身の努力を與へやうとすることは最早や議論の餘地のないことだからである。

然るにも係らず、此功利、此正義、此愛の要求は吾々の近代の社會に依て殆んど無視されてゐるのである。吾々には吾々の諸慾を限定する努力は第一の徳ともまたは最後の徳とさへも考へられずに、善生涯を送るには殆んど不必要な條件としてのみ考へられてゐるのである。

そればかりか之とは反對に、今日人生に關する流行的な最も廣汎にひろがつてゐる教に基き、人の慾望の増大は好ましい状態で、たとへば發達進歩、開化文明、及び完成といふことの徴のやうに考へられる。所謂教育ある智識階級の人々は、安樂の習慣つまりはぐうたら習慣を目するの、昏に無害と考へぬのみか、或道徳的な上品それは殆んど一の徳目を構成するやうな高尚さを示すものとして善であると思へ考へてゐるのである。

彼等惟へらく、欲望益々多く、それら欲望が彌々精鍊さればされる程可いと。

之を證明するのに最近二世紀間に於ける敘事詩特に小説に勝つて之れを明示するものはない。描き出された徳の理想を示顯する主人公及び女主人公は如何？

多くの場合何か高尚な卓越したものを現してゐると思はれる人々は、チャイルド・ハロルド以來フイレー・トロロープ乃至はモーパッサンの最近の主人公に至るまで、單にこれ隨した怠惰者のみで、彼等はみな幾多の人間の労働を贅澤三昧に消費し盡し、その代りに他人に對し何等の有益な仕事をもしない者のみと來てゐるのである。してその女主人公は如何にといふに此等の人々には多少の喜びをあれやこれやで與へる情婦だが、怠惰に至つては彼等同様で、且又彼等の贅澤に依て他人の労働を消費しやうとしてゐることも亦同様である。

私はいま眞に節制ある實業家等に就て文學中に適々出遣はずそれらの描寫に就いて論及しやうとするのではない。私は今群衆に對する理想として役立つ所の一般普通に見られる典型に關して語つてゐるのである。でつまり大多數の男女が似たり寄つたりになつてゐるといふ其特性を語つてゐるのである。思ひ出すと私が小説を書いてゐる時經驗した困難がある。(當時私には書き表せなかつた。)私はその困難と闘つた。そして私は今でも彼の眞の道德的美を構成する觀念がおほろけでもある小説家は纏て之と闘つてゐる困難だといふことを知つてゐる。それは何かといふに、理想的に善良で深切で同時に人生に忠實な描寫として結構な典型的人物を上流階級から取つて來て描寫するといふ困難なのである。人生に忠實である爲めには、上流有識階級の男女の描寫は、その日常の境遇に於ける這般の人をさながらに寫したものでなければならぬ。してその有様は如何にといふに贅澤で肉體的に怠惰でその上あれ

も欲しいこれも欲しいといふ生活である。道德的見地からして這個の人は反對すべき人である事は論を俟たないのである。けれどもそれが如實に誘引的に現はされる爲めにさういふさながらの描寫を必要とするので、小説家達はそれを試みる。實は私もそれをやつたのだ。で奇妙な申分かも知れんが、頗る付きの無益な怠惰な傾向を持つた流行る期間と云つたやうな格の不道德な私通者を殺人者決闘家乃至は軍人を造り出してからに、それ自身が誘引的だからもうそのあとは藝術も努力もあつたものではないのである。といふのが先づまあ這般の描寫であらう。所で、小説の讀者は如何にと云ふに、大體に於いてその種の人間だといふことは確かなもので、従つてまた讀めば直ぐ此等のチャイルド・ハロルド・オネーギン・ムシュー・ド・カモール連中が、またなく優れた人達になつて了ふのである。(註オネーギンはプーシキンの詩中の主人公、その次はフイレーの小説中の主人公。)

五

現代人が異教の自制及び基督教の克己を善にして且つ望ましき品性だと認むることを實際にせず、反對に慾望の増大を目して善且つ高尚なものと考へるそもくの證據は、現代社會に於いて大多數の兒童が受ける教育中に見出される。彼等は常に異教徒等の間に於いて行はるゝが如き自制に馴致されず、基督教に特有なる克己にも訓練なきのみならず、例のぐうたらや肉體的の怠惰や贅澤の習慣を除々に植ゑ付けられるのである。

私がかね／＼此種の問題を取扱つたお伽噺を作製しやうと思つてゐた。それは或一人の處女があつ

て、彼女に危害を加へた者に復讐をしようと思ひたち、その敵の子を奪ひ去り、魔法使の許に行つて何うしたら此盗み出した子供に對し最も残忍な報復が能きるだらうかといふ相談を持ちかける。その子は敵の獨り子なのである。するとその魔法使は、指定するその位置にその子を持ち去ることを命じて、それが最も恐ろしい復讐をすることになるといふことを納得させる譯である。所でその夜叉の女が彼のいふ事をきいてその通りにする。然るにその子に目をつけてみると、此はそも如何に、その子は富豪で子供のいない人に拾ひあげられてゐるではないか。女はびつくりして魔法使の許に行つて、之を責めたてる。と彼は待て々と女に告げるのである。子供は貧乏とぐうたら裡に育つ。女は氣が氣でない。すると又魔法使は待て々といふ。遂には何うなるかといふに、その夜叉女が満足する所かその子が不憫で堪らなくなつて來るといふ段取になる。その子は富のぐうたらと放埒中に人となり、折角持つて生れたい性質を臺なしにする。斯くして遂に肉體の病氣、貧乏、慚愧といふ連鎖を引起すのであるが、是等に對して彼はいやに感傷的なのだが、さて何うして之を拮抗していかさつぱり御存じないのである。道德生活に對する憧憬が起る。がその贅澤と怠惰とから馴致されたぐうたら身體の弱味が云ふことをきかぬ。無益な苦闘が續く。段々落ちぶれる。酒に吞まれる。それから犯罪發狂乃至は自殺と來るのである。

之は實に驚くべきことで、誰しも今日富行者階級の兒童の教育を見て驚怖せざる者はあるまい。で誰でも考へることは、最も残酷な敵のみが此等の缺陷及び害毒を子供に注入することが能きるのでといふことであるが、這般の病弊害毒をば兩親等特に母親等が今その子にじり／＼と注入してゐるので

ある。若しも人あつてその兩親によつて叮嚀に深切に臺なしにされた兒童等の最上最善の心靈どもに何を置き換へたものかそれを何う定めていゝか知る者あらば、まのあたり見る狀況で驚かされ、更にまたその結果如何にと思ふことに依て打驚かされるのだ。そも／＼此ぐうたら習慣たるや彼等子供等が道德的意義をまだ了解しないうちに染込まれるのである。昔に此節制及び自制の習慣が忘られてゐるといふばかりでなしに、スバルタの教育的實踐及び一般に古代に於けるそれに相反して此品性と來ては全然去勢されて少しも無いのである。昔に人が仕事に馴らされないとか、結實多き勞働に必要な諸徳たとへば心の集中、不撓不屈の精神、忍耐力、仕事に對する熱中、毀されたものゝ修復能力疲勞に對する通曉、成功の喜悅と云つたやうなものに不馴れであるといふのみならず、彼は怠惰で習慣づけられ、すべての勞働の製作品に對して侮蔑するやう訓育されてゐる。つまり毀すこと、打つちやること何うしてその物が作られたかといふ事には少しも考へ及ばずして、思つた通りのものが金で再び購へると教へられるのである。斯くて人は、總ての他人の進達に不可缺なる理性のそも／＼のはじめの徳を獲得する力を剝奪され、人々がやれ正義のけだかい諸徳とかやれ人に對する奉仕とか愛とか云つて説教をし讚美をする世の中へ野放しにされたのである。

青年が道德的に薄弱な鈍感な性質、それは教へ込まれた善と眞の善との間に差別を發見せず、何處でも當りまへになつてゐる相互的瞞着で満足してゐるやうな性質だが、それを附與されたらお芽出度いことである。さう行けば見た所萬事結構で、その種の人は往々死ぬる時まで覺めないその道德意識を以て結構に平穩無事に過すであらう。

併年、若し一度這般の生活の不道德なる所以の意識が大氣に満ち、天賦の心臓を貫く時、常に結構では済まされぬ。特にそれば晩年近く起る。屢々、いや却々繁く眞の赤裸々な道德に對する要求が目覺めることがある。すると實に痛ましい内部的争闘と苦痛とが始まるのであるが、それが併し極く稀に道德的情疎の勝利に於いて終結する。

そこで茲に一人の人があつてその生涯がよくないと感じ、根柢からそれを改革せんければならんと考へ、さうしやうと試みる。がその時彼は四周からして、同様の争闘を切り抜けやうとして遂にそれに負けて了つた人々に依て襲はれる。で彼等はいろんな方然で此改革の不必要を悟らせるやうに努め善徳は決して自制及び克己に據るものではないといふことを教へ込まうとしたり、乃至は飽食したり身のまほりを飾つたり、肉體的怠惰を貪つたりして、おまけに一人前の善い有益な人間になる爲めには密通さへするといふやうなひどい事をし乍ら善事業が能きると教へ込まうとするのである。で多くの場合、此内部的争闘は悲しむべき終結を見るのである。斯うして矢張り折角志を立てた人もあたらその弱點に依て征服せられ、一般の輿論に巻き込まれ、良心の聲を抑へて聞えなくし、自を賞め讃えてその理性を歪め、斯くてそのものとの道樂生涯を送り續け、自分だけは贖罪だとか、聖莫サントだとかを信する事に依て救はれると思つたり、乃至は科學研究に没入したり、國事に盡瘁したり、藝術に没頭したりすることで贖はれると思ひ込んでゐる。さもなくば争闘、苦痛の經驗から遂に氣狂ひになり自盡する。

がさうばかりでもなく、彼を取りまく所在誘惑裡にあつて、たまに現社會に生息する人にして太古

にあり今もある所のもの、即ち謂理性ある人々に第一番になくてならぬ眞理を了解する者がある。眞理とは外でもない。善生涯の完成には無くてならぬもので何の事はない眞先に惡生涯を止ることだ更にまたよりよき諸徳の完成には必要缺くべからざるもので、何の事はない是も眞先に禁慾の徳を獲得することだ。禁慾を換言すれば異教の所謂自制となり、基督教の己を棄てるといふ事になる。だからたまには徐々の努力で以て此主要な徳をうまく成就する者も従つてある譯である。

六

今私は高等教育を受けて進歩した四十男仲間の一人の書簡集を読んだ所だが、追放人のオガリヨフが他のもつと教育があつて且つ天才者であるヘルツェンに送つたものである。それらの手紙にオガリヨフは眞剣な考慮と高調した感激とを傳へてゐるが、讀者は彼若い同志に有り勝ちな、その友人におつびらに誇示してゐるといふ事を看過し得ないのである。といふのは彼は自己完成に就て語り、聖なる靈交、愛、科學的貢獻等に就て喋々し、人道乃至さう云つた種類のものに就て呶々してゐる。が同時に、彼はあたりまへのやうな調子で以て、彼が語るが如くんば「酔拂つて家に歸るか、乃至は倫落してゐるが可愛い奴と數時間雲隠れする」とうちの細君が時々立腹するといふことを書いてゐる。

斯ういつたやうな鹽梅で、非常に優しい、才能のある、教育のある人には、苟も妻ある人でありながらその妻の妊娠を心待ちに待ちつゝ（次の手紙には細君出産の報が書いてある）酩酊して歸宅し、ふしだらな女と雲隠れするといふ一事に何はさて置き非難攻撃をなすべき或者が存在するといふこと

すら起らんといふのは明かな事實である。一體全體内部争闘が開始され、少くとも或程度まではその飲み抜けと密通との悪傾向を征服せぬまでは、人は彼友情または愛に就いて考へる事は能きるものではない。況んや誰かの爲めに盡すとか、何事かを奉仕するとかいふことは能きるものではない。然るに彼は、此等の害悪に對して争闘せないのみか、彼はそれらのうちに非常にいゝものがあると考へてゐることは明かだ。そしてそれらの害悪は人の完成の爲めに少しも彼争闘の邪魔になるものではないと考へられることも明かだ。それだからこそ、友の前にはよく見られたいものなのに、その友の前で彼悪業を隠し立てもせずおつびらに見せるといふことになるのである。

といったやうな事が先づ半世紀前であつた。私はさう云つた連中と同時代に生れたのである。で私はオガリヨフをも知つてゐるし、ヘルツェンをも知つてゐる。また他の同種の型の人達や、同じ傳統に育て上げられた教育ある人々を知つてゐる。善に關する眞面目な熱心な望みと共に、個人的欲求の止め度なきしまりなきが其處にはあつた。そして後者が善生涯を送ることや善の完成や更にまた大業をなす事をすらさまたけるものではないと彼等によつて考へられてゐた。これ恰も彼等は冷い窯に捏ねもしない粉を置いて麵麩が焼かれると信じたといふべきである。斯くて年とつて然る後に、麵麩は焼かれなかつたといふことに氣がついて、云ひ換へれば其生涯から善いものが何も起らなかつたといふ事が解つて、其處に一種獨特の悲劇的なものを彼等は見たのである。

斯かる生涯の悲劇は洵に恐るべきものである。ヘルツェン、オガリヨフの生涯並びにその時代の他の人々に見える此悲劇と同様なものが、今日同見解に立つ多くの所謂有識者の生活中に存在してゐる。

人は善生涯に生きやうと望む。しかも此とは切つても切れぬ關係の連続すべきものが、彼の生息する社會に失はれてるのである。五十年前にオガリヨフ、ヘルツェンその他の人々がしたやうに、今日の大多數者も餘儀なく柔弱遊惰なる生涯を送るやうに思はせられ、甘い脂っこいものを食ひ、いろんな事で自分を樂ましめ、その慾望のあらゆるものを満足せしめ、善生涯を送るのに一向差支ないと考へてゐる。然し乍ら、さういふやうな善生涯はその善を結實しない事だけは事實で、遂に彼等は厭世觀に陥り、『人生の悲劇とはまさにこれだ』と歎じて云ふに至るのである。

更にまたおかしいことは、人々に悅樂愉快の分布は平等だといふことを知り、此不平等は悪であると認め、それを訂正せんと願ふ彼等が、自らその快樂愉快を、即ちそれらの分配に於ける不平等を却て論じ立て、止まないといふ一事である。斯ういふことをしてゐるので結局此等の人々は、眞先に果樹園に入り園中の實を残らず取れる丈は取つて了はうと急ぎつゝ、しかも同時に後から來た人との間に公平な分配を組織立てやうとして、その實彼等の手の届く限りの其實をふんだくる事を止めないと云つたやうな調子の人達をつくりである。

七

自分でその諸慾に身を委ね、善だとして慾望のままなる此生活を認め、しかも尙ほそれで善にして且つ有益な正しい愛ある生涯が送られるものと考へるその思慮に至つては、洵に驚くべきものであつて、後代の人間達は、その先輩達が吾々の富有階級の飽食家達——遊惰な色氣たつぷりの不精者等

——が善生涯を送つたと云ふのを聞いて、『善生涯』といふ言葉で現代の人々が何をそもく意味するか、それを正解すること甚だ困難になると私は考へざるを得ない。實にいま、人は吾々富者階級の生活に關する習慣的見地を姑く離れ、善生涯問題を見んか、敢て自分は基督教の立場から論じやうとするのではなく、正義の欲求としては極く低い見地から即ち彼異教的見地から論ずるにしても、先づ斯ういふことが首肯される。それは何かといふに、正義と公平の解り切つた法則に違犯するといふことは、子供等が尙ほ且つその遊戯の間（たが）に於いてそれを犯すことの悪なるを考へるほどだから、云ふまでもなく吾々富者階級は善生涯に就いては一語も語る権利が無いのだといふ一事なのである。

さうだ。私は善生涯をはじめよとは云ふまい。然り、それに少しでも近づくことをはじめよとさへ云ふまい。何はさて置き悪生涯を送ることを止めなければならぬのが吾々社會の人である。で如何なる人も這般の社會にある人は、己を圍繞する悪生涯の此等の状態を先づ打破しはじめなければならぬのである。

幾度人は彼辯解を聞かされたらう。即ち吾々の生活法を改める必要は更にないといふ言譯、更に進んでは傳習通の生活法に反する行動は如何なるものであつても不自然で且つ道化じみたことだ——見せびらかしのやうに見える。だから善行爲ではないのだ——といふ議論を幾度人は聞かされたらう。此議論は人々をしてその悪生涯から轉換することを防げしめる爲め鮮かにその辯解の骨子をなすやうに見える。さやう、若しも總ての吾々の生活が善であり正であり深切であるならば、その時こそ常習に従つてその行動を取るもよからう。が若しも吾々の生活が半分善く半分悪だつたら、常習に従はぬ

行動で善になるのが半分あれば、悪になる機會もまた半分ほどあるといふ譯になる。然し乍ら、若しも全然その生活が悪であるといふこと恰も吾々上流階級に於けるが如き場合に於いては、生活の悪傾向に反する無くして單一なる善行をも之を成し遂げることは能きるものではないのである。此惡潮流に反せざれば則ち悪行をなし得ても、善行をすることは能きるものではない。

吾々富者階級の生活に馴染まれた人は、先づ第一にその没入せる此等惡の状態から脱却せず正しき生活を送ることは能きない。つまり彼はその害惡を爲すことを止めるまでは善をはじめることができないのである。贅澤裡に生活する人に正しい生涯を送れといふことは土臺能きない相談なのである。彼よく如何に善をしやうと努むるとも、その生涯を轉換するまではその努力は何もならないし、善に行くまでに先づしなければならぬ順序として彼が目前に嚴然として立つ仕事の數々を完成するまではその努力は無効に終るのである。そもく善生涯といふものは、異教的見地からするも、更にまた基督教的立場より見るも、自己に對する愛と他人に對する愛との數學的關係によつて計量する外他に據り所がなく、また有り得ないのである。即ち自己に關する次から次といふ果てしなき注意を伴ふ己に對する愛、他人の勞働を食物にせんとする利己的欲求、さういふものが少ければ少いほど、他人に對する絶えざる心づくしや他人に附與する努力を伴ふ所の他人に對する愛が増大すればするほど、ますますその生活は向上して來るといふ譯である。

斯う云つたやうな鹽梅に生活の善といふことは、世の所謂聖人にしかく了解せられ、多くの眞の基督者から同様に考へられたのである。そして今たしかに多くの實直な通常人は之と同じ様式で該問題

を考へてるのである。即ち人が他人ほどこしをすればほど、自分に對する欲求が少ければ少いほど、彌々益々彼はいゝ人になるのである。従つて他人に對する與へ方が少くなればなるほど、自分に對する欲求が大きくなればなる程、彌々益々彼は悪い人になり下る譯なのである。

そして實に人が他人に對して持つ愛が増大し、彼自身に對する愛が少くなつて、道徳的に益々高上するといふばかりでなしに、自を愛することが少くなれば善くならざらんとしても得なくなるのである。反對にも云へやう。自分を愛すること彌々大に、従つて他人から勞力を要求すること益々大きければ、彼が他人に對して之を愛し之が爲めに働く可能性がそれに従つて少くなる。そして自分を愛する愛が増す度といふよりも、非常に大きい度合で以て少くなること、恰も長い端から短いそれに擬の支點を動かすやうなもので、之では實に長い腕を益々長めるばかりでなしに、短い方をますます短縮する事になるであらう。さういふ風で、若しも人が或る才能、愛を所持し、自身に對するその愛と心づくしを増大するならば、彼は他人を思ふ愛及び心づくしの力を減するだらうが、その度合に至つては彼自身に移した愛の増大の割合よりは遙かに多く他人に對する愛が失はれてゐるのである。他人を養ふ代りに人は餘りに食ひ過ぎるのだ。斯くて彼は殘物を人にやる可能性を缺いで了ふのみならず、食ひ過ぎてからに土臺他人を助けるといふその力を失つてしまふのである。

實際に言葉ばかりでなしに他人を愛する爲めには、矢張り言葉の上でなしに實際に自分を愛することを止めなければならぬ。多くの場合に於いて次のやうな事が起るものである。それは吾々が他人を愛してゐると考へ、さうであるといふ事を他人にも認めしめ自分もしかとさう考へてゐるが、吾々

はたゞ言葉の上で彼等を愛してゐるだけで、自分だけは實際に愛することを忘れないのである。他人に關しては何うして食はせやうか、何うして臥床に入れてやらうかと考へない。が自分らに對してはつひぞそれを忘れたことがない。だから、眞に他人を行爲の上で愛さうとするならば、吾々自らを行爲上愛することをしてはならない。あだかも今吾々が他人に就いては無關心であるやうに、如何にして吾々は食ふべきか眠るべきかといふことを忘れるやうに努めなければならぬ。

吾々は贅澤生活に馴れた氣隨氣儘の人間に就いて、あの人は「いゝ人だ」とか、「善生涯を送つてゐる」とか云ふ。然し乍ら、這般の人間は——それは男女を問はず——假令彼はやさしい特性、溫和、善質を所持してゐると云つても決して善くはあり得ないしまた善生涯を送ることも能きないのである何のことは無い。最上出來の小刀及び鋼鐵が研かれずに鋭くよく切れるといふよりも以上に能きない事なのである。善くあること、善生涯を送ることは、他人から取るよりも他人に與ふことの多きを意味するのである。然るに贅澤生活に慣れた氣隨氣儘の人は、それを斷行することは能きない。といふのは先づ第一に、彼自身慾望が常にあまりに多過ぎる（そして此原因は彼自身の利己心から起るといふよりも寧ろ贅澤に馴れてしまつてその馴致せられた生活から離されること彼にはつらい話なのである）からだ。それから第二に、他人から受取つたものは總て之を消費して了つて自を弱うし、勞働に堪へざるまでに自を渡し、従つて最早や他人の爲めに盡すことが不適當になるからだ。彼柔い臥床に長い間眠り、脂つこい甘い飲食物をしたま食ひ飲みしてゐる人、いつも奇麗にして温度の加減で適當な着物を着てゐる人、勞働即ち骨仕事をやることを少しも努めないといふ癖をつけた人は、要する

に些しも仕事をしてないのである。

吾々は自己の虚偽と他人の虚偽とから馴らされてゐる。そして他人の虚偽を看破しない方が吾々自身のためには都合のよいことになつてゐる。それだけまた彼等も吾々の虚偽を看破しないやうになるしいつの間にか吾々は不節制極る生活を送り居る人々を見て少しも驚かないといふ風になり、それらの人の直理及び有徳性、時には聖徳の主張をも之を疑はぬやうになるのである。

男であれ女であれ、或る人がはね仕掛の毛薄團二つ、柔い滑かな綺麗なシーツ二枚敷かれ、枕覆に包まつた羽毛入の枕二つ置かれた寢臺に眠つてゐるとする。其側には寢床から足を下す時冷くないやうにする爲めに敷物が敷かれてゐる。その癖其處にはスリッパの備へもある。また其處には必要な器が揃へてあつて、何か用たしに外出する要はない。何處きたないものを出しても、それは外へ持ち運ばれて總て綺麗さつぱりになる。窓はといふと日光が入つて彼を自覺させないやうに窓かけて覆ひ、い放題寝そべるのである。してまた此外に、冬には暖かく夏には冷く部屋内の温度の調節ができてゐて、蠅その他の昆虫の音がしないやうな仕掛になつてゐる。彼が眠つてゐる間に、お湯とか水とか沐浴の爲め時には入浴の爲め用意が出来てゐる。また顔すりの準備も出来てゐるといふ具合。お茶とか珈琲とか用意されてゐて、是等興奮的飲料はお目覺の爲めに先づ用ゐられる。するともう長靴とか半靴とか上靴とか——前の日よごれた幾組か——綺麗に掃除され一點の曇りのない硝子のやうに輝いてゐる。と同様に曩日よごしたいろんな着物がまた綺麗にされてゐるが、その着物といふのはたゞ夏冬で地柄が違ふといふんでは無くて、やれ春にはこれ秋にはあれ、雨の降る日は斯う、曇は何う

晴には何とそれ／＼適不適があるといふ譯合だ。洗濯され糊で固められアイロンをかけてびんとなつた清淨な下着は、それ／＼専門家に注文して叮嚀に氣をつけてこしらへさせた飾釦ボタンだとか、シャツの釦釦孔花もろともに用意されてゐる。

若しもその人が活動的なら、早起をする——七時——それでも彼の爲めに諸般の用意をする者共よりは二時間も遅い。ところが晝の着物、夜の寝巻の外に起き抜けの衣物履物といふのがある——化粧着とスリッパだ。それから彼は顔洗その他をやりブラッシをかける。所がそのブラッシたるや種々のものがあつて、石鹼もまたその通りだが、水を多量に用ふのである。(多くの英國の男女は何や斯やの理由で以て石鹼及び水の多量を彼等の身體の上に流し去るのを非常に得意にしてゐる)それから彼は着物を衣る。特種の姿見の前で(家の中のどんな部屋にでもかけてあるやうなのは別種の)その毛髪を梳く。次にたとへば眼鏡類といったやうな必要物を取る。それから今度は違つたポケットに鼻を拭く綺麗な手巾だとか、到る所何の部屋にも詩計があるのに鏈付の懐中時計を納めるとか、種々の貨幣小錢、時に要用的なお金を見付け出す手數から免れる特別な遺縁の場合の用意に)それに銀行手形、それから名前の印刷された名刺(それも云つたり書いたたりするのが面倒だから)それへ以て来て手帖鉛筆といったやうなものを入れる。婦人の場合では、化粧道具が更にその上複雑したものになり、胸衣長い毛の始末、裝飾、篋縁、ごむ紐、リボン、襟飾、髪どめピン、貝のピン、襟留めと云つたやうなものが入られる。

斯くて遂に總てがとゞこほりなく済むと、今度は大低食事でその日が明けける譯である。澤山砂糖を

入れたお茶や珈琲を飲む。上等の白い粉で出来た麵麩を食ふ。しかもそれに牛酪をしこたまつけて。時には小豚の肉をつけてサンド井ツチとしやれる。大抵の人はやや姑くの間葉巻や紙巻煙草を吸ふ。それから今しがた配達されたといふ朝の新聞を読む。それから何うするかといふに、散らかした部屋をちやんと片つけるやうに他人に云ひつけて出かける。その行先は事務所のお務めか商賣かで、事によると特に斯ういふ人達を見込んでこしらへられた馬車を驅るかする。それから来るのは殺戮された動物鳥魚類で料理した小晝で、よくく控へ目の所で三品に食後の菓子と珈琲とから成る午餐が之に續く。次に加留多遊びとか音楽演奏と来る——芝居、朗讀、會話、心持のいゝばね仕掛の安樂椅子に座り乍ら、蠟燭、瓦斯、電氣のまばゆく陰影のある光に照され乍ら。それが済むと再びお茶がはいる。再び食ふ——それが晚餐だ——でまた寢所へ行く。揺り起される。綺麗な下着が用意されてゐる。またよごされるために洗濯された諸道具が備へてある。

斯うしてたしなみのある生活を送る人の一日々は過ぎて行く。若しも彼が善い性質の人でその周囲の人達に對して特に數へ立てるほどの忌はしい習慣を持つてなければ、彼は善にして且つ有徳の生涯を送つてゐるのだと云はれるのである。

然し乍ら、善生涯とは他人に對して善事を爲す人の生活を謂ふのである。そして這般の生活に馴致された人が、他人に善を爲し得るであらうか？否、彼は人々に善をなし得る前に先つその惡を爲すことを止めねばならぬのである。時々無意識でやつてゐるとは云へ、斯種の人が他人になす損害の總勘定をしても見よ。諸君は彼がいゝ事をしてゐる所か、餘程それとは趣の違つたことを看取するであらう。

彼はその犯せる罪の罪ほろほしの爲めに多くのすばらしい事業を完成しやうとすることもあつたらう。が併し、彼はその慾望の餘りに多き生活に依て非常に弱らせられてゐる爲めに、そんな偉業を完成することは困難なのである。が恰もマアカス・アウレリウスがやつたやうに、彼はその勇猛心を振り起し、己が外套を纏うて床の上に寝て見やうと思へばまんざら能きんことでも無いのである。

そして斯うやつて彼は、毛蒲團ばね及び枕の製造には附き者の努力と手數とを取り去り得る、洗濯女——それは子供を生んだり育てたりする重荷を背負つた弱い異性だ——が強壯な男の爲めに下衣を洗ふさういふ日毎の努力を削除し得るのである。また夜は早く寢、朝は早く起きて、窓かけ及び夜の洋燈を險約することも能きやう。晝間着たシャツで夜そのまゝ眠ることも能きやうし、はだしで床に下り立つたり、庭に行つたりすることも亦能きやう。でまた彼は御筒の所で顔や手も洗ひ得るであらう。一口に云へば、今まで彼の爲めに働いてゐた人々のやうに生活し得るであらう。そして斯うやつてはじめて彼の爲めに今までなされた仕事をはぶくことが能きるといふものである。つまり彼はその衣物、その精製された喰物、その樂しみうさはらしに消費させた全努力を回收することが能きやう斯くて彼は如何なる状態の許に此等の労働が完成されるかを知り、それらの完成の爲めに如何ほどの人々がその生命を失ひ、傷つき、時としてそれを強いて爲さしめ貧困者の血を絞る者共に對し如何に憎惡するかといふことを學ぶのである。

然らば、這般の人がその自己耽溺と贅澤生活を捨つること無くして他人に善をなし、正しき生涯を送ることが何うして能きると云ふのであるか？

が吾々は他の人々が何う我眼に映るかに就いて喋々するを要しない。先づ各人の見なければならず感ぜなければならぬことは自分自身に關することではなければならぬ。

もはや私は、冷い敬意ある沈黙で我言葉を聞かれ乍ら、同じ事を幾度もく繰返すことはできない悦樂の生涯に生きる道徳的な人と云はず、既に中流階級の人さへ（勞働の長時日の結晶をその氣隨氣儘を満足さす爲めに日々消費して了ふ上流階級に就いて私は云ふまい）若しもその使用する所のものがすべて勞働者の勞働とその壓し潰された社會生活から産出されるものと知つたなら、何うしたつて安閑と生活してるといふことは能きるものでない。しかもその勞働者たる、何等希望を有たずして死にかけてゐるもので——無智で飲助で放埒で半分野蠻な者共で、或は鑛山或は工場で乃至はまた農業等の勞働で使ひ立てられそれで以て彼の使用する諸物件を製産するといふ譯なのである。

今此刹那、此を書いてゐる私と、誰であらうと此を讀むであらう讀者諸君と兩者孰れも健康で有福で、恐らくは豊富な贅澤な食物と、呼吸すべく純粹な暖い空氣と、冬と夏との別な着物と種々雑多な氣保養と、それから何より貴重なものとして晝の小閑夜のさまたぐるものなき休息とを持つてゐる。然るに此處に吾々の側には勞働者たちが生活してゐる。彼等は未だ曾て健康に適した喰物を取らず、健康にいゝ住家を持たず、充分の衣類を所持せず、氣晴しする手だても有たる者共である。その上に彼等は小閑といふものを持ち得ない。そのみか休息さへも得られないと來てゐるのである。斯くてそのはげしい勞働と睡不足と病氣とで疲れ切つた老若男女、その生涯の全部を己^{おれ}が所有せざる悦樂と贅澤の諸物件しかもそれは吾々に無くてならぬものではなくて要するに贅物だが、それを吾々に提

供する爲めにその生涯を臺なしにする老若男女が其處に居るのである。だから、敢て基督者と云はなくても道徳家即ち人情ある意見を披瀝するとか乃至は單に正義を尊重する人でさへあるならば、此際何うしたつてその生活を轉換しやうと欲するとか、乃至は斯かる状態の下に産出される贅澤品の使用を止めやうと思ふとかする外は行道が無いのである。

若しも茲に一人の人あつて眞に煙草造りの職工たちを不憫と思ふならば、自然彼は喫煙を止めることが第一の仕事になるであらう。といふのはその煙草を購つたり吸んだりすることを續けるならば、人の健康を害する煙草を備へるのを獎勵するやうなものだからである。そして是は他の一切の贅澤品に就て矢張り同じに云へる。若しもまた或一人が、麵麩を作り出すのに一通りでない苦心を要するにも係らず、その麵麩を食ひ續けることが能きるならば、必條それは現在の勞働状態が變ればいゝがと期待しつゝ、今無くてならないものを姑したりとも控へ目にする事の能きぬ人だからに相違ない。然し乍ら、嘗に不必要のみならず多分だとさへ思はるゝものに關しては、次の外に結論はあり得ないそれは若しも或る品々の製造に従事してゐる人々が可哀想なら、先づ我は這般の品々を如何なる理由ありとも要求する習慣を去らなければならぬといふ一事である。

然し乍ら、今日人は他の事をあけつらふ。彼等は種々雑多な入り組んだ議論を捏造するが、各通常人に自然と起る事柄に就てはつひぞ何事をも語らないのである。彼等の意見に従へば何も贅澤を控へる必要は無い。で或人は勞働者の状態に同情を寄せ彼等の爲めに演説をなし本を書くことは能きても同時に彼等を亡ぼすやうに見えるその勞働そのものに依て利益をむさほることは止めないのである。

或見解によれば、自分が利さなければ他人が利するだらうから労働者に無害な労働で己を利する分は差支ないといふことである。これ恰も既に購つてあるのだから乃至は自分が飲まなければ他人が飲むだらうから、私に有害なものであつてもその酒を飲まなければならぬといふ論法である。

他の説にしたがへば、吾々はその爲めに労働者に金即ち生計の資を備へてやるのだから、贅澤品製造に身を委ねてゐる労働者には却て利益があるのだといふ。これ恰も彼等に有害に吾等に餘計な物品を作らせるより外に彼等に生計の資を與ふる術がないといふ論調である。

所が第三の、今日最も行はるゝ説によれば何うかといふに、其處にはその従事する仕事が如何なるものであつても分業といふものがある以上——政府のお役人でも、僧侶でも、地主でも、製造者でも商家でも——彼がその利得を受ける労働階級の労働に對しては充分賠償するほど有益な事を爲し違けてゐるのである。或者は國家に仕へ、他の者は教會に仕へ、第三の者は科學に、第四は藝術に、そして第五は、國家や科學や藝術に仕へる者に仕へるといふ具合で、孰れも皆彼等が取る總てに對し、たしかに賠償して餘りあるものを人類に提供してゐるといふ信念を確乎として抱いてゐる。そして是は實に驚くべきことで、彼等の活動を少しも増さずにその贅澤な要求を絶えず増進しつゝ、彼等の活動はその消費した總てを賠償するものといふ確信を得續けんとしてゐる。

然るに、若しも諸君が他の人々に對する是等の人々の判斷に耳を傾くるならば、各自がその消費するものに値するものであるといふ所からずつとかけ離れたものだといふことがわかつて来る。政府のお役人達は、地主等がその費す所に値しないといふかと思へば、地主等は商人連に就て同様の事を語

り、商人連は政府の役人共に就て矢張り同じ事を云ふといつたやうな譯だ。然し乍ら是は彼等の内輪もめを來すといふ意味ではないのであつて、彼等銘々のものは、彼等が他人に盡すその奉公に丁度都合だけの労働をその他人から利してゐるのだといふことを常に人民に納得せしめる點で軌を一にしてゐる。そこで勞銀が仕事に依て定められるのではなく、想像的仕事の價值が給料に依て決定される。斯くの如く彼等は相互を瞞着してゐるが、彼等の心のどん底に於いては彼等の議論が自分等を辯護してゐないといふことを充分よく知つてゐるのである。即ち彼等の存在は労働者に對して必要がないといふこと、分業の故ではなくして單にさうする力を所持してゐるといふ丈の理由で更にまた彼等はそれなしには何をもちが能きぬ程役立たずにされたといふ理由で以て、彼等は此等の人の労働を利してゐるといふことを心のどん底では承認してゐるのである。

そして總て此事は、善生涯になくてならない最初の品性を先づ獲得することなくして善生涯を送り得るといふことを想像する人々の間に起るのだ。

して此最初の品性といふのは自制である。

八

自制なくして何處にも曾て善生涯のある無く今後ともそれはあり得ない。自制をよそにして、善生涯は想像されないのである。善の達成には須く先づそれを以てはじめなければならぬ。

諸徳には階段といふものがあつて、若しも人が高い階段に上昇しやうとするならば、最低階段より

始めなければならぬ。それで人が若し他の諸徳を獲得しやうと思ふならば、先づ獲得せなければならぬ最初の徳目がある。古人が稱して *εγκράτεια* 或は *σωφροσύνη* と云つたもので、自制或は節制といふものが則ちそれだ。

よしんば彼基督教に於いて自制といふことが彼自己拋棄の概念に容れられるにしても、尙ほ道德的道程は同じものである。それで結局自制抜きにしては基督教の如何なる徳目をも成就し得ないのである。で此自制抜きの諸徳完成不可能の眞理たるや、誰に依て發明されたといふのでもない。理窟はない。たゞそれをなすのに無くてならない性質だからである。

然し乍らいかなる正しき生涯にも第一階段の徳目をなす自制すらも、容易に直ぐ達成することはできないのであつて、これも段々に順序を踏んで進んで行かなくてはならない。

要之、自制は人間を諸慾から解放することであり、節制 *σωφροσύνη* に屈従することである。が併し、人の慾望は元來多く且つ雑多なものであつて、それらにうまく拮抗し終せる爲めには、基礎的な慾望を先づとつめなければならぬ——その基礎的な慾望の數々の上に更に複雑極る慾望が生ずるのである——さすれば別に此基礎的なものの上に生ずる複雑錯雜した強慾に一々當る必要はない。其處には、身體の飾り、遊戯、娛樂、無駄話、好事談、と云つたやうな複雑な慾望がある。してまた其處には、飽食、怠惰、異性愛の如き基礎的な強慾が存在する。須く人はその根本的な慾望を征服して了ふことから着手しなければならぬ。複雑より始むるにあらずして、基礎的なものからはじめ、一定した順序で對抗して行かなければならない。で此順序といふのは、物事の自然と人智の傳統の二つ

から決定されてゐるのである。

飽食してゐる者は遊惰に對して抵抗が能きないし、大食家のなまけ者は戀の慾望に打ち勝つことができない。だから、總ての道德的教義にしたがつて、自制にまで進まうとする努力は飽食の慾に對する争闘にはじまる。即ち斷食だ。現代に於いては、然し乍ら、善生涯の達成に當つて眞面目な關係は長い間失はれ、完全に失はれた爲め、それなしには他の諸徳の完成も覺束ないといふ自制なる最初の徳が、餘計なものゝ如くに見做されるのみならず、此最初の徳の達成に必要缺くべからざる連續的順序も亦之を認められない程になつてゐる。それが爲め斷食といふことも全く忘れられて了ひ、時には全く不必要な莫迦な迷信のやうに見做されるまでに至つた。

しかもその斷食たるや、恰も自制生涯の第一條件であるやうに、自制生活の第一條件が此斷食なのである。

よしや此斷食無しに、或者は善良たらんと希ふかもしれない。また或者は善行を夢想するかも知れない。然し乍ら斷食なしに善良であらうとすることは、自分の足で立たずに歩き出さうとするのと同じ譯合で所詮不可能な事なのである。

斯く斷食は善生涯に不可缺條件であるから、従つて大食は此とは反對の——つまり惡生涯の最初のしるしで有り、曾ても然うであつたといふものである。しかも不幸にして、此惡徳がその最高の度合に於いて現代人大多數の特性を形成してゐる。

現代吾々の周囲の人々の顔や姿を見るがいゝ。ぶら下つた頬つべたに願のついた顔に、それから肥

満し切つた四肢五體に、突出た腹に放埒極りなき生活の烙印が押されてゐるではないか。然りその外に考へやうはないではないか。先づ吾々の生活に就いて反省し、現代社會の大多數者の動機を考へても見よ。そして自ら斯う問うて見よ。『此大多數者の主なる關心事はそも／＼何であるか。』と。その時、吾々の眞の關心事を隠し、嘘や作爲のそれを口にしてゐる吾々には不思議におもはれるから。彼等の生涯の主なる關心事は味覺の満足、食ふこと即ち飽食の喜びだといふことを見出すであらう。貧乏人から富有者に至るまで食ふことが人生最大の目的であり最大の快樂であるかと私には思はれる。たゞし貧乏な勞働者連中は除外例だが、是はその慾望に身を委ねやうとしても如何せんそれが能きないとの理由で然りといふ譯である。彼等が其時と其方法とを得んか、忽ち彼の高等階級の眞似をしてからに最も趣のある甘いものを買ひ求め、彼等が能きる限りの多量を飲み食ひするのである。で彼等が食へば食ふほど、彼等が嘗に幸福になるばかりでなく、強く且つ健康體になるのだと自らさう思ひ込むのである。で此考からして彼等は、喰物を考へるのに先づ斯ういふ考方をする彼上流階級の刺戟を受けるのである。智識階級の人々は（最も高價な食物や肉は最も健康によろしいといふ確信を彼等に抱かした彼醫學を學ぶ人々に従つて）幸福と健康とは、趣のある滋養に富んだ容易に消化する喰物をし、こたゝ食ふことだと考へてゐる。それでも彼等は最後の一件を隠さうと努めるのである。

富有者の生活と、彼等が物語るその會話とを見聞して見よ。何といふけ高いものが彼等に充ち滿ちてゐることだ。哲學、科學、藝術、詩歌、富の分配、人民の幸福増進、若い者の教育、處が是等のものは、大多數者にとつては嘘である見せかけである。是等のすべては、その事務のひま／＼に、然り

眞の事務のひま／＼に彼等を支配する者だ。そしてその眞の事務とは何かといふに、小畫と晝餐の中間に、胃腑が一杯でもう此上は食へないといふ時に彼等を支配するものなのだ。男女大多數、特にその血氣盛な時の彼等には、唯一の生々した關心事は食事の外にない——何うして食はうか、何を食はうか、何時何處で食はうか。

そして此食事には、嚴肅なことではなくてもいゝ。喜びも要らない。聖別もまた用がない。おつぴらにする必要もまたないのである。

眼を轉じて旅行家を視よ。彼等の場合に就いても何を彼等が思つてゐるか甚だ看易い。『博物館、圖書館、議會——何とそれは面白からう。だが何處で吾々は食事しやうね？何處が料理の一番いゝ所かな？』だ。彼等が一緒に午餐の席についた所を見よ。着飾つて、匂はして、花で飾られた食卓を取巻く——そして何と愉快そうに彼等はその手を擦り、ほゝゑんでゐることだらう。

若しも吾々が多數の人民の内心を洞察するまで見つめ得るなら、彼等が一番願ふものとして吾々は何を見出すであらうか。それは朝餐と午餐とを望む食慾であらう。子供から大人、大人から老人總ての人々に一番重い罰は何か。麵麩と水だけを食はせることである。してまた最高の給料取は如何なる技藝家であるか。それは料理人だ。主婦の關心事中最も興味あるものは何か。中流階級の主婦達が日常しつけてゐる會話の話題は何に向いてゐるか。若し夫れ上流階級の主婦ともあらうものゝ會話にしてそれと同じ傾向を持たぬものがあるならば、彼等が中流の人達より教育を受けてゐる爲めでもなければ、その興味がもつと高尚だといふ爲めでもなく、たゞ單に彼等は自分で手を下さんでもいゝやうに

女中頭や執事を置いて、御馳走に就いて少しも心配の要らんやうな境遇だからであるといふだけだ。が一朝その便宜を失つたら最後、彼等が何うなるかといふことは諸君も察し得るであらう。總ての問題は食物問題を中心にして起ることは云ふを要しない。松雞の値段はいかほどかとか、珈琲を出すに最もいゝ方法は何かとか、甘いお菓子のやき方は如何にと來る。それは何處場合にしても、人々が一緒に寄り集ると——命名式、葬式、結婚式、教會の献堂式、友人の送別會、同じく歡迎會、聯隊旗の聖別式、紀念日の祭、大科學者哲學者德望家の死と誕生の諸集會——まるで彼等は第一要求に依て主に動かされて集つたかのやうに寄つて來る。彼等は斯うくの譯で集まつたといふ。が眞赤な嘘だ。彼等はみんな其處へ行くと食へると思ふ——可い趣のある喰物を——其處へ行くと飲めると思ふ。そして是が彼等を一堂に集める源動力なのだ。數日前から此日まで、獸類は殺戮され、食料の人つた籠が割烹屋から届けられてある。料理人。助手、料理部屋係の下男下女と云つたやうな連中が綺麗に洗濯されびんと糊のついた上着と帽子で今日を晴れと着飾つて「仕事」をするのであつた。料理番長といふのは、月に五十留もそれ以上もとつてるのだが、命令を與へる丈けで手一ぱいである。料理人が刻むことも、捏ねることも、灸ることも整頓することも、裝飾することもやる。勿體ぶつてその日の司式者は、所作をする、胸勘定をする、考へる、果ては一人の藝術家のやうにその眼差で整理する。庭師は庭師で花をいぢくる。おさんどんはおさんどんで何かをする。斯ういふ手数がかゝるのであつた。一團の人々が斯くして仕事をするのであつたが、百日の勞働の結果もたつた一日で呑み込まれるのである。それで參列者は或る大學者とか或る德望家とかいふ人に就いて語り合ふ爲めに、死

んだ友交の過ぎ去つたことを想ひ出す爲めに、乃至はまた今し新生涯に一步を踏み入れやうとする新夫婦にお芽出度を云ふ爲めに、一堂に會したのかも知れない。

中流及び下流階級では、如何なる祝祭、如何なる葬式、如何なる結婚式も大食會なることは金輪際間違ない。また實際さう考へられてるのである。希臘や佛蘭西に於いては、「結婚式」も「祝宴」も同じ言葉だといふ所に至るまで、此集會の動機が大食に存するのだ。然し乍ら、富有な上流階級では、特に長い間金持である品のいゝ側では、非常に手際よく此點を隠す。そして食ふことはそもく第二義で、見榮上必要だといふ風に見せかけることをうまくやつてのける。所が此作爲は甚だ與し易いもので、多くの場合、お客様の言葉——彼等は少しもひもじくないといふ——その文字通りの意味で満腹して歸るのだから。

彼等はその御馳走を斯うして偽る。食事は彼等は必要なものでなくて、却て重荷だといふ。では虚偽だ。試みに彼等に——彼等が豫期する精製された皿の代りに、麵麩と水とまでは云はないが——雜炊、粥、さういつたやうなものをあてがつて見よ。何んな騒ぎが起るか見るがいゝ。そしてその時なる程集會の主な關心事は表面の看板ではなくて、たゞ彼大食だつたわいといふことが如何に明瞭になるかをみるがいゝ。

人々の商ふものを見よ。町を通つて行つて、そして人々の買ふものを見よ——裝飾の品物と飽食の代物である。そして是はさう無ければならん事で、外に何うともすることが能きものである。それは、人が必要があればこそ食ふので、それ以外には食はないといふ事から、此慾望を節制力の下に置く爲

めに食事に就いて考へる事ができないのだといふのみならず、若しも人が只必要のまに／＼食ふのを止める——即ち腹が一杯だといふ時——といふ場合ならば、物事の状態は實際今日目撃される以外には存在し得ないからだ。若しも人々が食事の快を愛するならば、また若しも彼等が自を此快樂を愛するその愛慾に身を任すならば、若しも彼等がそれをいゝと見るならば（現代大多數者の場合の如く、または假令智識階級のものさうでないやうに見せかけても、その實は全く無教育者と同等の彼智識階級者の場合の如く）、此快樂の増大し行くことには最早や制限がなくなつて来る。それ以上越らせないやうにするその制限がなくなつて来る。要用の満足には限りがあるが、快樂には限りがない。吾々の要用の満足の爲めには、麵麩、雜炊、米を食へば足りるのである。がしかし快樂の増大には、此くらゐならといふ風味調味に實際の境がないのである。

麵麩は必要にして充分な喰物である。（此はたゞもう裸麥の麵麩だけで烈しい労働に堪へた強壯な活動的な丈夫な幾百万人の人々に依て實證されてゐる）。然しそれに何か又味をつけるとたゞのよりは嬉しい。肉を煮た汁にその麵麩を漬すと更にいゝ。この肉汁に青菜を入れるとますますよく、菜葉も一種でなく幾種も入れるに越したことがない。肉を喰べるのも結構。肉は煮るより炙つた方がよさうだと来る。牛酪をそれにつけると尙さらいゝ。そして生ま焼がよろしいとなる。それでもまた或部分だけ選んで喰べるとなる。然もそのつけ合せとして野菜と芥子が要る。それへ飲み物がほしくなるから葡萄酒がつく。擇り好みとあつて先づ赤いのにしておく。或人は之でもう澤山だ。が人によつてはソースで味がうまくついた魚肉に白葡萄酒を潜らせたのを所望することも能きる。で富者も通人も

は水、冬は煮た果物、ジャムなど甘い皿一つ調はないうちは何かしら物足りない様子に見える。しかも斯うして吾々の食事、控へ目な御馳走が食はれるのである。此種の御馳走の愉快、樂みは段々増長して行き得るのである。して又實際増大される。斯くて此増大に限りが無いのである。刺戟的な點心、午餐前の添物 (Hors-D'œuvres)、腸付 (Entrées) それに食後、それから味が違ふものゝ種々なるませ合せ、次に花、裝飾、食事中の響樂と止め度がない。

そしておかしきことには、日頃斯ういふ御馳走で食ひ過ぎてゐる人々は、それと比べる爲めには、豫言者の警告を呼び起したベルハザル饗宴も物の數ではない——恥とも知らず香氣に、一かどの道徳生活をそれで行つてゐるであらうといふことを信じ切つてゐる。

九

斷食は善生涯の不可缺條件であるが、斷食するにしても、一般自制の問題に於けるが如く、何から一番先に吾々は斷食すべきであらうかといふ疑問が起る。如何にして斷食すべか。幾度食事をするがいゝか。何を食はうか。何を斷ち物とすべきかといふやうな問題が起る。そして吾々は、仕事を眞剣にやるのにそれを成就する爲め缺くべからざる順序を経べきを忘れて到底それが不可能なるのと同じやうに、斷食をするにしても何處からそれをはじめべきか——何を以て食物の節制をはじめべきかを知らずしては能きない相談なのである。

え、斷食だつて？しかも如何にして斷食すべきかと、何からは始めるかといふ細い分析までつくつ

て於いては？此思想は多數の人々には嘲笑すべく蠻的なものに見えやう。

今でも私は覺えてゐるが、修道院の禁慾主義を攻撃してゐた福音傳道師が、かれのオリジナリティーに就いて得意顔に私に向つて斯う云つたことがある。「吾々の基督教は斷食や困窮の基督教ではなくてビフテーキの基督教なんである。」と。基督教、或は一般に徳——而してビフテーキ！

長い／＼暗黒時代、異教と云はず基督教と云はず總ての指導者が失はれその間、多くの蠻的な不道徳な考へが吾々の生活中に侵入し來り（特に善生涯への第一段といふ最低の域にまで來て——誰それに注意を向けぬ食物關係にまで割込み來り）、爲めに吾々は今、基督教乃至は徳とビフテーキを結び合す議論のその大膽不敵さ加減とその無感覺とに氣さへつかない程になつてゐるのである。

吾々は此二つの聯想を單に見慣れぬものが吾々に起つたといふだけで驚かない。若し吾々が一瞥するのみにて注視せぬとする。一聞した丈で聴取しないと。然る時は、にほひもなければ音も無く、その不馴れな人にびつくりさせる或物に氣を止めずゐる人ほどには馴れ切つて了へない人には實以て奇々怪々なその事柄も無いのである。道徳の領域に於いてもまたその通りなのである。基督教と道徳のフビテーキとの結合の場合にはまさに然り。

數日前、トウラの吾々の町に於ける屠殺所を參觀した。其處では能きる丈け動物に苦痛を與へまいといふ見地から、大都市でやつてるやうな新式な改良された建物になつてゐる。復活完息日の二日前の金曜日であつた、澤山の家畜がそこに居た。

是より曩・傑作の書『食物倫理』を讀んで、屠殺を觀たいものだと思つてゐた。といふのは自分の

眼で親しく彼の肉食主義が論議される時に起る問題の實際を視察する爲めであつた。然し乍ら、先づ私はそれをするのが恥かしいと思つた。丁度それは誰でも常に何處かでその受難が起つてゐるが、扱てそれを避けることの能きぬその苦難を見に行くのがつらいといふ經驗だ。それで私はその參觀を長い間躊躇してゐたのである。

然るに少し前に私は、その家を訪ねた後ツウラに歸る屠殺者と途で遭つた。彼はまだ新まへの屠殺者で、その役目は小刀で突き刺すそれであつた。私は彼に向つて、自分が殺したいといふことでその家畜に濟まないといふ氣がしないかと訊いてみた。彼はそれに對して月並な返事をした。「濟まんでもあつたもんですか。それが必要なんですもの。」然し私は彼に向つて肉を食ふことは必要でも何でもないといふことを語り聞かせ、それはたゞ贅澤に過ぎないのだと云つてやると、彼は成程とうなづいた。そしてそれから彼は實は家畜に對して濟まんと思ふことを白狀した。「ですがそれで私は何うすれやいゝのです？私は麵麩を得なければや干ほしになりますからね。」と斯う彼は云つた。「第一私は殺すことが恐ろしくして仕方がありません。私の父は一生涯中つひぞ雛つ子一羽手にかけて殺しやしませんでした。」露西亞人の大多數者は殺すことは能きない。彼等はあはれみを知つてゐる。そして『恐れ』といふ言葉でその感情を吐露するのである。此男は矢張り恐ろしがつてゐた。併し彼は長くはその状態にゐなかつた。彼が私に語るのを聞くと、仕事の大部分は各金曜日に行はれ、その日は夜まで仕事が続けられるといふことである。

是もさう長くない前の話だが、これも一人の屠殺者なる退役軍人と話したことがある。彼も亦はじ

めは殺すことは残忍なことだといふ私の主張に驚いてゐて、それはさういふ定命なんだといふ月並なことを云つてゐるが、最後に彼は私の次の言葉に同意した。『奴等がおとなしくつて馴れてゐる場合は特にさう感じないか？何しろ奴さん達何も知らずにお前をたよつてやつて来るだらう。可哀想ぢやないか。』

是は實に恐ろしい事だ！と云つてもそれは動物の受難と死を云ふのぢやない。人間が彼自身のうちに於いて不必要にも彼最高の靈的能力——彼自身に似通ふ生きた動物に對する同情とあはれみのそれ——を抑制するといふ一事に就いて云ふのである。しかもそれに止らず。彼自身の感情を亂して残忍にするといふ事に就いてある。してまた如何に深刻に人心裡に彼殺す勿れの警戒が刻まれてゐることであらう。

曾て、莫斯科から歩いた時（註、彼が莫斯科に冬の間滞在して春になつてヤスナヤ・ポリヤナへの歸途、毎度つた。でセルバウホフはトルストイは汽車に乗る代りにざつと百三十哩以上の道程を徒歩で歸るのである。その途中の一驛の名である）木を持つて來た近所の森林へ行くセルバウホフからの荷馬車曳によく乗つて呉れと云はれたものだ。それは丁度復活祭の前の木曜日だつた。酒を飲んだと直ぐわかる強さうな赤ら顔の素朴な馬車曳と一緒に先頭の車に私は乗つた。とある村に入ると直ぐ吾々は、よく太つた、毛のない、淡江色の豚が、今し屠殺されやうと前庭から引きずり出される所を見た。豚はまるで人の叫びのやうな恐ろしい聲を張り上げて泣いてゐた。丁度吾々がそこを通りかゝる時人々は豚を殺しはじめた。一人の男は小刀で豚の咽喉を大きく切つた。豚はます／＼大聲を出してまるで突きさすやうな音でひい／＼泣き叫んだが、たう／＼人手から逃れて血まみれになつたまままで駆け出した。まさ

／＼とその場を見た私はもうその他のこまかしい所は觀察するにしのびなかつたのである。たゞ私は人間らしい淡江色な肌を見て、その絶望的な叫聲を耳にした丈であつたが、荷馬車曳はその細い事を觀、注意してそれをじつと見てゐたのである。人々は豚をつかまへ、たゞき倒し、咽喉切りを完成した。その叫聲が止んだ時、件の馬車曳は重々しくため息した。『あゝ、こんな事して人は實際罰を受けんもんかなあ？』と彼は云つた。

人が殺戮を嫌ふことはしかく強烈なものだ。然るに實例により、貪婪心を刺戟することにより、神がそれを許し給ふといふ主張により、就中、習慣によつて、人々は此自然の感情を全然なくして丁度。金曜日に私はトゥーラへ行かうと決心した。そしておとなしい深切な私の知合に遭つて、一緒に行かないかと云つて見た。

『さう、私は設備が行届いてゐるといふことを豫ね々々聞いてゐるので、いつか行つて見たいとは思つてましたが、若しも家畜が屠殺されてゐるなら、とても私は這入れませんねえ。』

『何うして、這入れないの？それが丁度私の見やうとするものではないか。若しも吾々が肉を食ふなら、それは殺されなければならぬ筈だ。』

『いえ／＼、私は能きない。』

此男が遊獵家であつて、彼自身禽獸を殺戮する人だといふことを念頭に置く時これは却々味のある話である。

さう斯うして吾々は屠殺所に行つた。入口で既に人は重苦しい嫌な鼻を突く臭氣を感じて來るが、

それは大工さんの膠か、膠上のペンキよろしくの臭氣である。吾々が近づくに従つてその悪臭がひどくなる。建物は赤煉瓦で、大きく、幾つも丸天井があり、高い煙突が幾本も建つてゐる。彌々吾々が門を入つた。右手には體裁よく圍はれた構内があつて、廣さは一エーカーの四分の三ほどある——週二回家畜が賣られに此處に追ひこまれる——そして此圍ひに隣接して門衛の家があつた。左手には謂ふ所の部屋の數々があつた——即ちアーチ型の入口、勾配のあるアスファルトの床、死體を動かしたり釣り上げたりする爲めのいろんな仕掛を備へた部屋である。門衛の壁に面した屠殺者が血だらけのエプロンをかけて、是も矢張り血塗られた筋骨たくましい腕をまくしあけた袖の下だら出して座つてゐた。彼等は丁度半時間ばかり前に仕事を終へた所なので、結局吾々はその日たゞ空の室をのぞくことができたゞけである。假令是等の部屋々々は兩側に開け放されてはゐるたけれど、暖い血の胸ぐるしい臭氣が漲つてゐた。床は褐色に光つてゐたが、それは孔に凝結した血のせいである。

屠殺者の一人が殺生の次第を語り聞かせ、その殺戮の行はれる場所を見せに吾々を案内した。私は彼を充分よく了解しなかつた。そして私は悪しくしてまた甚だ恐るべき觀念を、這般動物どもの殺される道程に就いて形作つてゐた。私は斯う想つたのである。屢々ある事だが、實際は想像よりも更に弱い印象を私には起しそうだ。だが此處で私は間違つてゐたのである。

次にまた私はその屠殺所を訪れた。私の行つたのはいゝ時であつた。復活主日前の金曜——六月の暖い日であつた。膠と血のほひは最初訪問した時よりも更に強烈に更に滲み渡るのを覺えた。仕事はやられてゐる最中であつた。きたない塵だらけの構内に家畜は一杯ゐた。そして動物は部屋内の總て

の柵内に追ひやられた。

入口前の通りには荷馬車が幾つも置いてあつて、牡牛や犢や牝牛などがはいいつけられてゐた。駿馬にひかれた他の荷馬車は、生きた犢を満載してゐたが、その犢等は首をうなだれ、揺すぶられ、ならばせられて下されるのであつた。同じやうな荷馬車はまた牡牛の死體を容れてゐるが、眞赤に尖る兩の肺臓の首つたまや眞赤な血潮の河にびくり／＼動く脚が突張つて屠殺所から驅り出されてゐた。柵根に沿つて家畜賣買業者の家が建つてゐた。そして彼等自身長い衣物を着て、その手には鞭と杖とを持つて構内を歩き廻つてゐる。自分所有の目じるしをタールでつけたり、取引したり、或はまた彼部屋々々に導かれる構内へ大きな庭から牡牛等を誘ひ出す爲めであつた。是等の人達は明かにみんな金銭事と勘定づくで先入主となつてゐて、是等動物を殺すは正か不正かといふやうな問題と没交渉なこと、恰も彼部屋々々の床を蓋ふ血の化學的構成に就いて何等疑問なきと同様であつたのだ。

屠殺者は一人も外に見えなかつた。今し彼等はみんな部屋内で仕事をしてゐるのである。その日は百頭ばかりの家畜が屠られた。私が丁度一つの部屋に入りかけて姑く扉のところ立ち止つた。といふのは第一にまだ動き廻つてゐる死體で部屋が一杯になつてゐたのと、血が床を河と流れ上からほたり／＼落ちてゐたからであつた。總ての屠殺者は血で塗られて其處に居た。それで私も入らうものならその血で穢れることは必條であつた。或者は下に置かれた死體をぶら下げた。他の者は扉の方へ行つた。第三の者は、屠られた牡牛をば、そのおつ立つた白い脚を以て横へてゐた。その間に他の屠殺者は強い手でその堅くはつた皮をびり／＼剥がして行くのであつた。

私が立つてゐた扉の向側から、大きな赤いよく太つた牛が曳かれて入つて来た。二人の男がそれを引きすつて来たが、それが入るや否や私は屠殺者が小刀をその首に加へ之を刺すのを目撃した。件の牡牛は、まるで四足を急になくしたものとやうに、どつかとその腹を地につけ、忽ちにして一方にひつくり返り、その足とその臀部でじたばたし出した。すると直ちに他の屠殺者が反対側から牡牛のじたばたする足部に身ををどらせて行き、その角ををさへ、その頭を地に振り伏せた。其處を他の屠殺者が小刀を振つて咽喉を切つた。首は下から赤黒い血をほとぼしらせしたが、その血の流れをば赤く血塗られた少年が来て錫製の水盤に受けた。斯ういふことが牡牛に行はれてる間、牡牛は絶えず起き上らうとするが如くにその足を振はしてゐた。そしてその四足をば空中に動かした。水盤は忽ち一杯になつたが、牡牛はまだ生きてゐた。そしてその胃はおも／＼しく動めいて、前後の脚は屠牛者が離れて持つたる程烈しく揺すぶつた。一つの水盤が一杯になつた時、少年はそれを頭に載せて蛋白工場へ運んで行つた。入れ交りに他の少年がまた別の水盤を持つて来るとそれも立ち所に一杯になつたが矢張りまだその牡牛の體は波打ちその後脚は動いてゐた。

流血が止んだ時、屠殺者はその動物の頭を起し、今度は皮剥ぎにかゝつた。しかも尙ほその牡牛は身を跳くことを止めなかつた。首は皮をはがれて、赤と白の筋を見せてゐた。そして屠殺者によつて與へられた位置を保つてゐた。即ち兩側に皮がぶら下つてゐたのである。それにも係らず、動物を跳がくの止めなかつた。そこで他の屠殺者が脚一本を押へてへし折り之を切り去つた。所が残りの三本足と腹部はなほその動搖を續けてゐた。斯くて他の足も切り去られ、同じ所有者の他の牛のそれら

と一緒に傍に置かれた。やがてその死體は巻き揚げ機械に掛けられ引きずり去られ、その動搖も止んだ譯である。

斯くして私は扉の所から、第二、第三、第四の牝牛と見て行つた。がどれもこれも同じ様子であつた。舌噛みしめた首を切り去るのも同じやうに、また彼四肢五體の同じうごめきが其處にあつた。たと違ふのは、さううまく一打ちで屠殺者が動物を打ち倒すといふ譯にはかりは行かぬ事で、ある時はやり損つて牡牛がはね上り、吼えたけり、血まみれになつてゐる乍ら逃げやうとしたりする事もあつたが、斯ういふ時にはその頭が門の下に引き据ゑられ、第二撃を食つてぶつ倒れるのであつた。

その後で私はその牛どもが導き入れられる方の扉口に沿うて入つて見た。此處で私は同じものをより近く、従つてまたよりはつきりと視たのである。然し乍ら、主に私が此處で見たのは曾て見なかつた所のもので、牡牛どもが如何に強いられて此入口に入るかといふことを知つた。いつでも牡牛が先づ柵内で掴へられ、その角に繩をつけて引つぱり出されるのであつたが、血のほひを嗅いで前進を拒むのである。それで或時は吼えたけり、後に戻らうとしてしりごみをするのである。その引く力は二人力以上だから、屠殺者の一人はいつでもその後を廻り、牛の尾をひとつらへ軟骨がばり／＼音をたてる程烈しくふり動かしてやつとの事で前進するのであつた。

或る一人の所有者の家畜相手の仕事がみんな済んで、彼等は次のよに取りかゝる事になつた。次の籤の第一に當つたのは、たゞの牝牛でなくて種牛だつた——立派な、よく太つた、黒色の、足に白い星のある、若い、堂々とした、精力に充ち満ちたものであつた。それが引きずられてやつて来たが、

首を下げて頑強に拒んでゐた。その時後から来た屠殺者はまるで機關手が警笛の頭を握るといふ格でしつほを握つて之を振つた。軟骨がほり／＼鳴つた。そこで種牛は綱を持つた人たちをひつくり返すまでに猛然と躍進したのである、やがて止つた。その黒い眼で四周を眺めながら。其處には皿で一杯になつてゐる白いものがあつた。が再びしつほを音させた。其處でまた一躍した種牛は、丁度註文の場所に達したのである。打ち手は近づき、ねらひを定めて之を打つた。がその一撃はしくじつた、何かは以てたまるべき、種牛は跳ね上り、吼えたり、逃れて後方へ突進した。その扉の道にゐた人々はみんな側に飛び寄つたが、物馴れた屠殺者は危険に馴れた人々の威勢で以て、立ちにその綱を挿へ、再びしつほの牝牛が部屋に戻され、門の下にその首を引き据ゑられ、もはや如何ともすることができなかつた。打者がすばやく、星のやうな毛のわかれ目の一點に狙ひを定め、流血颯とほとばしる中にその見事に打たれたのを知つた。斯くして生命うちに充實してゐた立派な動物は倒れた。そして流血の續く間、首から皮が剥がれる間その首と脚部とが動いてゐたのである。

『見やがれ、いま／＼しい悪魔奴が落ちるにだつて眞直ぐにや落ちなかつたぞ！』屠殺者がその皮を首から剥がし乍らぶつ／＼云つてゐた。

五分間後にその首は黒の代りに眞赤になつて皮を剥がれて突つばつてゐた。五分前には實に見事な色で光つてゐたその兩眼が、じつとなつたまゝとんどよりと硝子張りのやうに化してゐた。

その後私は小動物の屠殺場に當てられた部屋に行つて見た——大きな部屋で下はアスファルトの床である。ついたて付きの卓上で羊や犢が殺されるのである。此處では丁度仕事が済んだ後であつた。

血のにほひがしみ込んで長い室内には、たつた二人の屠殺者しか居なかつた。一人の男は死んだ小羊の足に息を吹き入れ、その手でふくらんだ腹をなで／＼した。他の男は血にまみれたエプロンをかけて、曲つた紙巻煙草をくゆらしてゐた。重く臭い臭氣に満たされた長い暗い部屋内にはもう此外何もなかつた。私の後から一人の男が入つて來たが、見た所軍人の古手で、若い二歳の牝羊を持つて來た。その首に白點のある黒で、その足は結はへられてゐた。彼はまるで寢床へでも置くやうにして一つの卓上とその動物を載せた。老軍人は屠殺者二人に挨拶したが、明かに懸念な間柄であるらしく、いつ閑になれるんだと尋ね出した。紙巻煙草の方が、卓の端で鋭くされた小刀を手にして近づき乍ら休日には休めるといふ答であつた。生きた牝羊はまるで死んでふくらんだもの見たいに横になつてゐた。若しその短い小さいしつほをはき／＼動かしたり、その脾腹をいつもよりも速く波打たせてさへなかつたらまるで死んだ者だつた。軍人はそのもたけやうとする頭を力を入れずに軽く押へつけた。依然として話し乍ら、屠殺者はその左手で牝羊の首を握つて、咽喉を切つた牝羊はぶる／＼震へた。小さいしつほがしやちこ張り動くのは止んだ。血の流出を待ち乍ら彼は一たん火の絶えた紙巻煙草に火をつけはじめた。すると血は滾々と流れ出して來て牝羊はその身を跳きはじめた。些しの障碍も受けずに二人の會話ははづんで行つた。もうそれは身ぶるひする程いやな事だつた。

* * * * *

それから考へさせられるのだが、日々無数の料理場で、牝雞や松雞がその首をはねられたり血を流したり、或時は滑稽に、或時は恐ろしく、ばた／＼その羽を動かしたり、びくり／＼と動かしたりす

るそれらに就いては果して奈何？

しかも見よ。深切な、たしなみある貴婦人が、いゝ事をしてゐるつもりで、同時にま二つの相反した命題を主張しながら、此等動物の死體をがつく／＼召し上るであらう。その二つの相反した命題とは第一が、彼女の主治醫が彼女にさう思ひ込ました如く、植物性の食物ばかりで營養をとつて行くには彼女の體質ではちと無理だといふことで、つまり體質が弱いから肉食は是非缺くことの能きぬものだといふことである。そして第二は、彼女があまり神経過敏だから、彼女自ら動物に苦痛を嘗めさせることは能きないのみならず、その苦惱の現場を見ることさへ堪へらるゝものではないといふ事である。だから可哀相な此貴婦人は、人間に不自然な食物を食ふて生きるやうに馴けられた故に確實に弱く彼女はまた動物殺戮を起すことを全然避けることが能きないといふ羽目に陥つてゐるのである——何となれば彼女は動物を食ふからだ。

10

吾々は是を知らないものなどと白ばつくれることは能きない。吾々は頭隠して尻隠さずの駝鳥ぢやない。若しも吾々が吾々の見ることを欲しない者を拒んで見なかつたなら、そのものは存在しないのだなどと思ふことは能きないのだ。で吾々が見ることを欲しないものが、則ち吾々の食はんと欲する者であるといふ場合は特に然りである。若しも眞に不可欠なものならば、乃至は、若しも不可欠ではなくても少くとも何かには有益となれば……だか、それは全く不必要なのである。(トルストイ自らの註に曰く、此の事

に就いて疑ふ者は、幾多科學者及び醫學者に依り書かれた該問題に關する數多き著を渉獵せよ——たとへばエー・ハイグ博士の小冊子『常食と食物』の如き乃至は『病氣の因果法中一要素として尿酸』に關する彼のそれより大きい科學書を繰け——此うちに於て肉は人の滋養には必要なものではないことが證明されてゐる。そして彼等をして彼等が式な醫者たちの云ふことに耳を傾けしむる勿れ彼等はたゞ單に彼等の先輩及び彼等自身に依りて長い間さう認められてゐたといふだけで肉は必要だといふ主張を堅守してゐる。また彼等は總て古いもので傳統的なものが常に保護されるやうに、一生懸命で且つ悪意を以て彼等の意見を防禦するのである。アイルマア・モードの註に曰く、まさに是等文章の出版に用意してゐる最中、トルストイから手紙が来て、如上ハイグ博士の著書に關する例證を「そしつけ加へて呉れるやうに」とのこと、故を以て此論文の最初の版にはトルストイの此註は缺けてゐるのである。」そしてたゞ役立つのは動物的感情を高めることであり、欲望を刺戟することであり、密通と暴飲とを促進することである。そこで是は引續き次の事實によつて確實なるものとされるのである。それは若し深切な上品な人々——特に婦人及び娘等——が、それが論理的に何うすゝむかといふ先を知らずに、道徳がピフテーキと兩立し難いことを感じ、彼等が善良であらうと期するや否や止めて了はなければならぬ事だ。

然らば、私の云はんと欲する所のものは何か？ 道徳的人たらんが爲めに肉食するのを止めなければならぬといふ丈か？ 決してさうではない。

私はたゞ斯う云はうと思ふ。善生涯には善行爲のある順序を缺くべからざるものである。即ち若しも正しき生涯に人の願望が眞剣であるならば、彼等は何うしても一つの定つた連結を辿らなければならぬといふことである。更に此連結に於いて人の向つて努力すべき第一の徳は自制であり克己であらうといふことである。そうして自制を求めて行くならば人は何うしてもある一定の連結を追はねばならず、その連結に於いて第一は食物上の自制——斷食だらうと思ふ。次にその斷食に於いて、若しも彼が本統に眞面目に善生涯を送らうとしてゐるならば、彼の斷ちものとすべきは常に動物的喰物の

使用であらう。何となれば這般の喰物によつて起る激情の發作に就いては喋々しないとしても、その使用は端的に不道德である。といふのは道德的感情に反對な行爲——殺戮——の完成をそれは含んでゐるからである。しかもそれは趣ある喰物を要求する慾と貪婪とに依てのみ高まつてゐるのだ。

動物的喰物を斷つといふことが斷食の第一行爲でありやがてまた道德的行爲の第一のものであるといふ詳細の理由は、『食物倫理』に驚歎すべき程證明されてゐる。そして唯一人に依てのみならず、全人類に依て、所謂人道の眞面目なる生涯中その最善のあらはれとしての人格裡にそれが説明されてゐるのである。

然し乍ら、若しも動物を食ふことの害悪——即ち不道德——が、長い前から人類に知られてゐるならば、何故に人々は此法則を認容することにまで至らなかつたのか？ 理性に依てといふよりも、輿論に依て導かれるやうに馴らされる人々は斯うして質問するであらう。

此問に對する答は斯うだ。人類の道德的進歩——如何なる種類の進歩でも是をその基礎とする——は極めて遅々たるものである。がまた同時に、眞の進歩、偶發的のそれではないものゝ標識は、その途中で防碍されぬことであり、そしてその連續的な加速度なのであると。

しかも肉食主義の進歩は此種類のものである。前述の著述に引用された著述家數氏の言葉に於いても、はたまた多くの原因からして無意識に段々々と食人的風習から肉食に移りつゝある人類の實際生活に於いても示された彼進歩は、同じやうに疑ふべからざる力をしめず運動に於いて同様の經過を踏んで行つてゐるのである。そして此進歩は段々々々擴大されてゐる——即ち肉食主義にまで。此運

動は過去十年間に急速の進歩を遂げた。單行本、定期刊行もの孰れにも是を主題としたものが毎年々々その數を増しつゝある。段々人は肉を止めましたといふ人達に出遭はすやうになつて來た。そして外國でも特に獨逸英國美國に於いて菜食料理の旅館及び精進料理屋の數が年一年と増してゐるといふ有様だ。

此運動は地上に神の王國を建設する努力にその一生を捧げる者には特殊の喜びを喚起する。といふのは肉食主義がそのものに於いて該王國への重要な段階だといふ意味からでは無くして（總ての眞の段階は重要でなければさほどでもないものかの二つに一つである）、それが道德的完成への人類の願望が眞面目であり眞剣であるといふ事の標識となるものだからである。何故そのしるしになるかといふ説明は第一階段を以てはじめて、それに自然な何うしても他を以て換ふべからざる順序を取つたからだと云へる。

人は是に就いて喜ぶことを忘れてはならない。あだかもそれは家の最上階に達しやうとしても無益な試みをなし、または出たらめに他の點から壁に這ひ上る努力をし抜いた後、遂に階段の第一段から經昇ることになり、その方へ集り、此階段の第一段を上らずには最上階へ上る道は絶對にないと知つた人々を悦んでやることを誰も忘れないと同じ譯合である。完

——ホワアド・ウィリアムスの『食物倫理』の序——

（千八百九十二年）

何故人々は自らを麻酔せしめるか？

—アレキセーエフ博士著「酩酊」の序—

人々が彼等自らを麻酔せしめる品、ウォッカ、葡萄酒、ビール、ハシシユ、阿片、煙草、それから通俗的でない品、エーテル、モルヒネ、蠅取菌等を用ひると云ふ事實をどう説明すべきであるか左様な習慣はなぜ起つたか？なぜそれがあらゆる種類の人々、野蕃人、文明人の間にそんなに早く擴まり、又今も尙擴まりつゝあるのであるか？ウォッカや葡萄酒やビールのないところには、阿片やハシシユや蠅取菌藥があり、又煙草は到る處で常用されて居ると云ふのは、どうしてであるか？

なぜ人々は、彼等自らを麻酔せしめる事を欲するのであるか？

なぜ彼が葡萄酒を飲み始めたか、又なぜ今でもそれを飲んで居るのかと誰かに聞いて見るがよい。彼は答へるのであらう、「おう、それは愉快だ、そして誰れでも飲む」と、そして彼はかう云ひ足すであらう、「それは私に元氣を附けて呉れる」と。或る人々——葡萄酒を飲む事の善し惡しに就いて、一度も考慮を費した事のない人々——は、葡萄酒は健康にもいゝし人の力をも増やすと云ふ事を、云ひ足すかも知れない。即ちもうずつと前に根據のないものと證明されて居る事を述べ立てるかもしれない。

い。

喫煙者に、なぜ彼が煙草を用ひ始めたか、又なぜそれを今でも喫んで居るかと聞くが、すると彼も亦答へるでめらう、『意屈凌ぎのために、皆んな喫んで居る。』と。
阿片、ハシシエ・モルヒネ又は蠅取菌フライアガリツツを使用する人々に依つても、多分これと同様な答へが與へられるであらう。

『意屈を凌ぐ爲めに、愉快になる爲めに、人々はそれを用ひて居る。』然し『意屈を凌ぐ爲めに。』或は『皆の人がさうするから』とて、指をひねくり、口笛を吹き、歌を口吟み、笛を吹き或はさうした種類の事をするのならば、言譯が立つかもしれない——即ち、自然の富を消費する必要がないやうな事をなし、又はそれを作り出すのに大變な努力を拂はねばならぬところのものを費やさず、又自身や他人に著しい害を與へないところの事をするならば、言譯も立つであらう。が、煙草、葡萄酒、ハシシエ又は阿片を作るためには、何百萬と云ふ人間の努力が費され、何十億エーカーと云ふ出來のいい土地が（屢次土地に缺乏せる住民の間で）馬鈴薯、大麻、罌子粟、葡萄、煙草を育てる爲めに使用せられて居る。その上、此等の明らかに有害な品を用ひる事は、各人の知り且つ認めてゐる恐るべき害惡を起し、凡ての戦争や傳染病を合せてよりも以上に多く、人々を亡ぼすものである。そして人々は此の事を知つて居る。故に『意屈を消す爲めに』愉快になる爲めに』或ひは『皆の者がさうする』からとて此等の品々を、彼等が用ひる事はあり得えない筈である。

そこには何か他の原因があるに違ひない。絶えず又到る處で、人は、彼等の子供を愛し、それら

爲めとあらば如何なる種類の犠牲をも厭はないが、彼等の飢えた貧乏に惱まされた、子供を養ふには確かに充分な、又少くとも彼等を見まわすから救ひ出すには充分な金を矢張りウオツカや葡萄酒やビール、或ひは阿片やハシシエや又煙草にさへも費やして居るところの人々に出逢ふ。若しも、人が一方に於いて彼の愛する家族の窮乏と苦痛と、他方に於いて麻酔せしめる品を節制する事とのいづれか一つを撰ばねばならぬ時、その後者を撰ぶとせば、明らかに——彼は『誰れでもさうする』又はそれは愉快なものであると云ふ考慮よりも以上に有力な何ものかに依つて、さうさせられるのに相違ない。明らかにそれは『意屈を凌がない爲めに』とか、或は單に『愉快にならないが爲めに』なされるのである。が然し、彼は或それよりもつと有力な原因に依つて、動かされて居るのである。

此の原因は——私が此の論文を読み、他の人々わけでも葡萄酒や煙草を常用して居た頃の私の場合を観察して見出した——限りに於いては——此の原因は、私が思ふに、分次ぎのやうに説明されよう。

彼自身の生活を觀察する時は、人は屢次彼自身内に二つの異つたもの、一つは盲目で肉體的のもの、他は目の開いた且つ精神的なものを認め得るであらう。その盲目な動物的なものは、旋條を掛けた機械のやうに、食ひ、飲み、休み、眠り、繁殖し且つ動く、この動物的なものに縛られた目の開いた精神的なものは、單獨では何事をもしない、が唯動物的なものゝ行動を評價する、その行動を是認する時はそのものと一致し、それを非認する時はそれから分離しながら。

此の見張りをする存在物をば、一つの矢で北を、そして今一つの矢で南を指さす羅針盤に比較する

事が出来る。それは、それとその矢が共に同一の方向を指してゐる限り認める事は出来ないが、それ等が相異つた方向を指すや否や明らかになるところの或るもので蔽はれてゐる。

同様にして、その現はれを通常我等が良心と名付ける、その目の開いた精神的な存在物も亦、常に、一方の端で正の方を、他の端で邪の方を指し示してゐる。そして我等がその示す針路、邪から正への針路に従つてゐる間は、それを認める事がない。然も若し此の精神的な存在を知らうとするのならば、唯人は良心の命令に反した何かをすればそれで充分である、然る時それは、如何に動物的な活動が良心の指示する方向と相離反したものであるかを示すであらう。そして恰も、間違つた航路を取つてゐると意識してゐる航海者がその進路を羅針盤の示す方向に直すか、或は此の間違つてゐると云ふ意識を塗り消してしまふかしない以上、機、機關乃至帆を續いて取扱ふ事が出来ないと同様に——動物的活動と良心との二元を感じる各の人も亦唯その活動を良心の要求に會致せしめるか、或は良心が彼に與へるところの、彼の動物的生活の間違ひに關する指示を蔽ひ隠すかのいづれかをして、初めてその活動を續ける事が出来る。

凡ての人間生活は、單に此等の二つの活動、即ち(一)その活動を良心と調和せしめる事、或は(二)元の儘の生活を續け得んがために、良心の指示から自己を隠す事、から成り立つものと云ふ事が出来る。

或る者は第一の事をなし、他の者は第二の事をする。第一の事を達し得んがためには、唯一つの方法、即ち道德の開発——自らの表に光りと、その示すところのものに對する注意力とを増す事があ

る丈けである、第二の事をするためには——自己から良心の指示を隠すためには——二つの方法がある、その一つは外的なもので、他は内的なものである。その外的な方法は、人の注意をして良心の與へる指示から遠ざからしめる事に従事するにある、内的な方法は良心そのものを暗ますところに在る。

●人は、眼前の事物を見る事を避けるに二つの方法を持つてゐる。即ち視線を他の一層人目を惹く物に外らすか、或は自身の眼を遮るかすると同じ様に——丁度それと同様に人は又、良心の指示を彼から二つの方法で、即ち彼の注意を色々な仕事、懸念、愉快或は遊戯に轉ずる外的な方法か、或は、注意そのもの、器官を妨げる内的な方法の孰れかに依つて、隠す事が出来る。道德的感情の鈍い低い人々に取つては、屢次外的な方法丈けで、彼等の生活の間違ひに就いて良心の與へるその指示を、彼等が認知しないやうにするに充分である。然し道德的に敏感な人々には、それ等の方法は屢々不十分な事が多い。

外的な方法は全然、人間の生活と良心の要求との不調和の意識から注意を、遠ざけはしない。此の意識は人間の生活を妨げる、故に人々は、元の儘の生活を續けて行き得んがためには、更らに信頼するに足る内的な方法に頼らなければならない、その方法とは、かの麻酔劑な材料で腦を毒して、以つて良心そのものを暗ますところのものである。

人は良心の要求する通りには生活をしてゐない、のみならずその要求に従つて生活を改造する力を缺いてゐる。此の不調和の意識から注意を外らしめるべき氣晴らしも不充足であるが、或は陳腐なものとなつた、故に——その生活の間違ひに就いて良心の與へる指示に無關心に生きるために——人々

は(一時の間良心を毒する事に依つて)丁度人が眼を閉ぢて見度くないものを自分から隠すと同じやうに、良心が自らを現はすところの器官の働きを停止せしめる。

二

ハシシユ、阿片、葡萄酒及び煙草の世界的な需要の原因は、趣味のうちにも、又はそれ等の供する何かの快樂、氣晴し或は逸樂のうちにも存しない、が單にそれは、良心の要求を自己から隠さうとする人間の必要のうちに存在する。

私は或る日通りを歩いてゐた。そして四五人の談じ合つてゐる饜者の側を通つた時、私はその内の一人がかう云ふのを聞いた、『勿論、それは素面では恥しくつて出来ぬことだ！』

人が素面である時は、酔つ拂つてゐる時全く正しく見える事を恥かしく感ずる。此等の言葉のうち、我等は人々をして麻酔物に赴かしめる根本的な内因を發見する。人々は彼等の良心に反した何事かをした後恥しく感ずる事を避けるためにか、又は彼等の良心には反するが、然し動物的本性がさうする事を誘ふところの行爲をなしける状態に、前以つて自らを導くために、麻酔物に頼る。

人は素面である時は、醜業婦の後を追ふ事を恥ぢ、盗む事を恥ぢ、殺す事を恥ぢる。此等の事柄のうちの一つをも、酔つ拂つた人間は恥ぢない、故に人が若し彼の良心の責める何事かをしようと欲するならば——彼は先づ自らを麻酔せしめる。

私は、私の親戚に當るその仕へてゐた老婦人を殺して審問に附けられた一人の男料理人の申立に驚

かされた事を憶えてゐる。彼は彼の情婦である女料理人を遠のけて愈々實行の時が來た時、彼はナイフを持つて寢室に入らうと欲した。然し素面では彼の企んだ仕事が出来ないのを感じたと申立てた……『人は素面である時は恥ぢる。』彼は引き返へした。前以つて用意しておいたウオツカを二杯呑んだ、そしてその時やつと用意が整つたのを感じた、そして罪惡を犯した。

犯罪の十分の九迄は、さう云ふ風にして、
『勇氣をつける爲めに飲め。』と云ふやり方でなされてゐる。

墮落する婦人の半ばは、酒の影響で墮落する如何はしき家への來遊者の殆んど凡ては、酩酊者である。人々は此の良心の聲を止める酒の効能を知つてゐる、そして故意にその目的のためにそれを使用してゐる。

人々が良心を抑へるために自らを麻酔せしめるのみならず、又彼等は、(酒の効能を知つて) 他をして良心に反する行爲をせしめようと欲する外にも、故意にそれ等の人々を麻酔せしめる——即ち、人々の良心を失はしめるために、彼等を麻酔せしめる手筈を整へる。戦争に於いて兵士達は、常に接戦の前に酩酊させられる。凡ての佛蘭西の兵士達は、セバストーポリの攻撃に際して酒を飲まされた。防禦地帯が占領されたが、兵士達が掠奪せず又無抵抗の老人や子供を虐殺しない時は、屢々彼等をして酩酊せしめよと云ふ命令が發せられる、そこで初めて彼等は、要求されてゐる事柄をする。

人々は皆、良心を悩ます或何かの惡事をした結果として、酒を呑む習慣に陥つた人々を知つてゐる。何人も、不道德な生活を送る人々は、他の者よりもまして麻酔の材料に惹きつけられるのに氣付く事

が出来る。強盗や泥棒の團體、又は醜業婦は、一日とても陶酔物なくしては生きる事が出来ない。人々は皆、麻酔物を使用するのは良心の苛責の結果であり、且つ或る不道德な生活様式に於いては麻酔物が良心を眩ますために使用されると云ふ事を知り、又容認する。人々は又同じく麻酔物の使用は良心を眩ますと云ふ事を、即ち酩酊者は、それが素面である時は瞬時の間すら考へようともしない行爲をする事が出来ると云ふ事を知り、且つ容認する。人々は皆此の事に意見を同うする、然し不思議な事には、麻酔物の使用が、例へば窃盗、殺人、強姦等の行爲に導かない時——麻酔物が或恐るべき罪惡の後にはなくして、我等が罪惡と考へない職業に従つてゐる人々に依つて使用される時又麻酔物が、一時に多量ではなくして、絶えず程よい分量で消費される時——その時は、(或何かの理由から)麻酔物は良心を眩ます傾向を有しないと見做されてゐる。

斯くの如くして、裕福な露西亞人の各食事前のウォッカ及び食事と共に飲む葡萄酒、或は佛蘭西人のアブサン、或は英吉利人のポルト酒とボルター麥酒、或は獨逸人の生麥酒、或は裕福な支那人の程よい分量の阿片、並びに以上のものと共に喫む煙草は——唯快樂の爲めに飲まれるのであつて、それ等の人々の良心には何等の影響も與へないと、考へられてゐる。

若しも此の常習的な麻酔の後には如何なる罪惡も、窃盗も或は殺人も行はれなくて、唯通例の悪い馬鹿けた行爲が行はれるならば——然る時は、此等の行爲は自然に起つたものであつて、麻酔に依つて惹き起されたものではないと考へられてゐる。若しも此等の人々が、刑法に觸れるやうな行爲を犯してゐる以上は、良心の聲を抑へる必要がない譯けである。故に習慣的に自らを麻酔さす人々の送る

生活は善であつて、自らを麻酔ささない時と寸分も違つた事はないと考へられてゐる。麻酔物の絶え間ない使用は、彼等の良心を少したりとも眩まさないと考へられてゐる。

たとへ各人が經驗に依つて、人間の心の工合が酒や煙草の使用で變はると云ふ事を、興奮物さへ取らなければ恥ぢるに決まつてゐる事柄をも恥ぢなくなると云ふ事を、如何に小さい良心の苦悶の後でも人は常に或る麻酔物に頼ると云ふ事、及び麻酔物の影響の下にありては、自分の生活や境遇を反省する事が困難であると云ふ事、及び麻酔物の間斷なき規則的な使用は、時折不規則に使用する時と同様の生理的な結果を生ぜしめると云ふ事を知つてゐる——而も、凡て此等の事にも拘はらず、程よく飲み又は喫煙する人々に取つては、彼等が麻酔物を用ひるのは少しも良心を眩ますためではなくして唯風味のため或は快樂のためであるやうに見えるらしい。

然し人は、眞面目に又公平に——自らを責めようとしてではなく——次ぎの事を了解するために考慮を費す必要がある、即ち第一に、若しも時折多量に麻酔物を使用する事が、人の良心を眩ますならば、それを規則的に使用する事も亦、それが多量に使用されようと少量であらうと、(常に先づ腦の働きを強めその後それを鈍らして)それと同じ結果を生ぜしめる筈があると云ふ。第二に、凡ての麻酔物は、良心を眩ます性質を持つてゐる。そしてそれを常に——その影響の下で、窃盗や殺人や強姦が行はれる時に於いても、又はその影響の下で、それ等の麻酔物が使用されなかつたならば、發せられないに決つてゐる言葉が放たれ、又は考へたり感じたりされなかに決つてゐる事柄が考へられたり感じたりされたりする時に於いても持つてゐると云ふ事、そして第三に、若しも麻酔物の使用が、窃盗

強盗又は醜業婦の良心を鎮め且つ眩ますために必要とされるならば、又同じく、たとへ他の人々が正當な名譽なものと考へやうとも彼等自身の良心が非難するところの職業に従事する人々に依つても要求されると云ふ事である。

一言にして云へば、大量であらうと少量であらうと、時折であらうと規則的にであらうと、或は社會の上流に於いてとあらうと下級に於いてとあらうと、麻酔物の使用は一つの原因、即ち生活の仕方と良心の要求との間に存する不調和に氣付かないために、良心の聲を抑へる必要に依つて呼び起されたものであると云ふ事は、避け難い事實である。

三

此のうちにのみ、凡ての麻酔物就中煙草——多分最も一般に使用され、且つ最も多く有害な——廣い需要の理由が存在する。

煙草は人を快活にし、頭を明瞭にし、人を單に他の何かの習慣のやうに——少しも酒のやうな良心の鈍麻を生ぜしめる事なくして——人を誘引するものであると考へられてゐる。然し唯諸君が注意深く、喫煙しようとする特別な欲望の起る時の心状態を、觀察すれば充分である、然る時諸君は、煙草を以つてする麻酔も、酒と同じく良心に作用を與へる。故に、人々はその目的の爲めに煙草を要求する時は、意識して此の麻酔の方法に頼つてゐるのである事を、確信するであらう。若しも煙草が單に頭を明瞭にし快活にすると云ふに止まるならば、斯様なそれに對する熱狂的な渴望、或る一定の場合

に決つて現れる渴望はないであらう。人々は煙草なしでよりは麵麩なしで濟して行き度いと云はないてであらう、又屢々實際に於いて、何物よりも煙草を好むやうな事はないであらう。

かの自分の女主人を殺した男の料理人は、彼が寢室に入つて行つてナイフで彼女の喉を突き、そして彼女が喉鳴りをして倒れ、血が瀧をなして奔り出た時——彼は勇氣を失つたと語つた。『私は彼女の止めを刺する事が出来ませんでした。』と彼は云つた。『が私は寢室から出て客間へ戻りました、そしてそこへ腰を下ろして巻煙草を喫きました。』煙草で自分を麻酔した後、初めて彼は寢室に戻る事が出来た、そして老婦人の喉を掻切つた後、彼女の持物を漁り始めた。

その瞬間、煙草を喫み度いと云ふ欲望が、頭を明瞭するためにも、或は快活になるためにもなく、彼に企らんだ事をやり遂げるのを邪魔するところの何ものかを眩ます必要上、彼の内に起つた事は明らかである。

喫煙者は何人も、或る何かの、特に困難な瞬間に於いて、自らを麻酔せしめようとするそれと同一の劃然たる慾望を、自らのうちに認める事が出来るであらう。私は煙草を常用してゐた頃を思ひ浮べ、私が特に煙草の必要を感じたのは何時であつたか？それは常に私が、私の記憶に蘇つて來る或る事柄を思ひ出し度くない時、私が忘れ度い——考へ度くないと慾した時の瞬間に於いてとあつた。私は何もせず座り込んでゐる。そして仕事を始めなくてはならない事を知つてゐる、然ししやうとする氣持がしない。そこで私は煙草を吹かして、その儘座り續ける。私は五時迄に或る人の家に行く約束をした、然し他の人の家で餘り長く居過ぎた。私は約束を外した事を思ひ出す、然しそれを思ひ

出し度くない——そこで煙草を喫かず、私は腹が立つた、そして或人に不愉快な事を云つた。そして悪い事をしてゐると氣づいて止めなくては可かぬと云ふ事が分つてゐる。然し疝癪の排け口を慥へ度い——そこで私は煙草を喫んで怒り續ける。私は歌留多をやる、そして自分が賭けてもいゝと思つて居た以上の金額をなくする——そこで私は煙草を喫む。私は困難な境遇に陥つた、悪い行ひをして間違ひをやつた、そして私は私の陥つてゐる困難を認めてゐて之から脱け出さねばならぬ、然しそれを認め度くない、そこで他人を責める——そして煙草を喫ふ。私は何か書いた、そして自分の書いたものに充分満足しない。私はそれを放棄すべき筈であつた。然し私はしようと計畫した事をやり遂げ度い——そこで煙草を喫む。私は論争をする、そして論争の相手と私とが互ひに理解もせず又理解し得ない事が分る、然し私は自分の意見を表白したい、そこで私は話し續ける——そして煙草を喫ふ。

人が容易く自分を麻酔する事が出来ると云ふ事と外見上無害に見える事との外に、煙草とその他の多くの麻酔品との異なる點は、その持運びに輕便な事と、一寸とした困つた出来事に容易く間に合はせる事が出来ると云ふ事とである。人は何時も煙草と紙とを持つて歩く事が出来るが、阿片や葡萄酒やハシシユを使用しようとする時、何時も手許にない道具が必要である事は云ふ迄もなく——煙草が他の麻酔品に優つて便利な事は、阿片やハシシユや葡萄酒の麻酔は凡ての感覺及び或る稍長い期間の間を受け又はし出でかす一切の行爲に及ぶが——然し煙草から来る麻酔は、何か切り離した出来事に向ける事が出来る事である。諸君はしてはならない事をしようと欲する、そこで諸君は巻煙草を喫つてしてはならない事をするに充分な程度に自分を麻酔さす、それから諸君は再び正氣に戻る、そして明

瞭に考へたり話したりする事が出来る。若しくは諸君がしてはならない事をしたと感ずる——再び諸君は煙草を喫む、間違つた無作法な行爲に關する不愉快な意識が消失する、そして外の仕事に従事して、それを忘れる事が出来る。

然し習慣を満足さし又は退窟を凌ぐためになしに、今將さししようとしてゐる又はしてしまつた行爲に關する良心の苛責を消すための手段として各喫煙者が喫煙に頼ると云ふ個人的な場合は別として、人々の生活様式と喫煙慾との間には明白なはつきりとした關係があると云ふ事は、全く明瞭な事柄ではないであらうか？

何時青年達は煙草を喫み始めるのであるか？普通は、彼等が子供らしい無邪氣さを失ふ時に於いてである。喫煙者達が、更らに道徳的な生活状態の中に入る時に喫煙を止める事が出来て、墮落した状態に陥るや否や再び喫み始めると云ふのは一體どうしてであるか？何故賭博者達の殆ど凡てが煙草を喫むのであるか？何故婦人のうちでも規則的な生活を送つてゐる者が喫煙する事が一番少いのであるか？何故淫賣婦や狂者が凡て喫煙するのであるか？習慣は習慣である。然し明らかに喫煙は、良心を麻痺せしめようとする要求と或る確かな關係を有してゐて、又その要求される目的を滿たしてゐる。

人は殆んど凡ての喫煙者の場合に就いて、如何なる程度に迄、喫煙が良心の聲を眩ますかと云ふ事を觀察する事が出来る。喫煙者は凡て自分の慾望に身を任せる時は、社會生活の緊要な要求——彼が他人に認める事を慙し、又自らもその良心が煙草に來つて麻痺されない内は、あらゆる場合に於いて認めて居るところの要求——を忘却し又は忽がせにするやうになるものである。通常の教育を受けた人

は誰しも、自身の快樂のために他人の平和、慰安、及びそれ以上更らに健康さへをも侵害する事は許す可からざる事であり、不作法にして又不人情な事であると考へる。何人も人々の座つてゐる部屋を濡したり、喚いたり、冷い、暑い或は嫌な臭ひの空氣を入れたり又は他人に迷惑を與へたり害を加へたりするものではない。然し數千人の喫煙者の内誰一人として、煙草を喫まない婦人や子供が空氣を呼吸してゐる部屋の中に、有害な煙を作り出すのを躊躇しない。

通例若しも喫煙者が其場に居合はす人に向つて、『拘ひませぬか？』と云ふならば、皆はその時の極まりの返事の言葉は『いえ、一寸も。』である事を知つてゐる。(喫煙しない人に取つて、汚れた空氣を呼吸したり、臭い煙草の吸ひ端を、洋盃や皿や蠟燭立、若しくは灰皿の中に於いてすら見出す事が不愉快でない譯がないが。)然し假りに喫煙をしない大人が喫煙に對して異議を申立てないとしても、誰一人その承諾を聞く事をしないところの子供に取つて、それが愉快な事でも、又いゝ事でもあり得る譯がない。而も他の凡ての方面に於いて廉直な又寛大な人ですら、小さな部屋で食事中子供達の前で喫煙して少しの良心の苛責も感ぜずに煙草の煙で空氣を汚してゐる。

煙草を喫むと心を使ふ方面の仕事が容易に抄取ると云ふ事は、一般に云はれてゐる事である(又私もいつもさう云つて居た)。そしてそれは疑ひなく、單に人がその心を使ふ量丈けを考へるならば、本當の事である。喫煙をし、又その結果として嚴密に自分の考へを評價し且つ考量する事を止めた人に取つては、それは恰も突然澤山な考へを得たかのやうに思はれるであらう。然しそれは、彼が本當に多くの考へを得たからではなくして、單に彼が思考の統制力を失つたからである。

人が働く時は、何時も二つの存在物を彼自身の中に意識する。一つは働くものであり、他はその働きを評價する。その評價が嚴密であればあるだけ、その働きがより緩慢になり一層よいものとなる、そしてさうでない場合はその反對である。即ちその評價者が彼を麻酔せしめる何物かの勢力の下にある時は、それ以上に多くの仕事がなされるが、然しその質に於いては遙るかに下等である。

『喫煙をしないと私は物を書く事が出来ない。私は進んでやる事が出来ない、私は始めはしたが續いてやる事が出来ない。』と云ふのが一般に云はれる事であり、又私が何時も云つてゐたところのものである。その意味するところのものは實際何であるか、それは汝が書くべき何物をも持つてゐないかまたは汝の書かうと欲するものがまだ意識のうちで熟し切つてゐないで、單にほんやりと現れ始めてゐるに過ぎない、そして中なる評價をする批評者がさう汝に告げてゐるかのいづれかを意味するものである。若しも汝が喫煙しないならば、汝の始めたものを捨てるか、或は考へが心の中ではつきりする迄待つかの孰れかをするであらう。汝は汝に漠然と現れてゐるものゝ眞髓に徹しようとして試みるであらう、現れて來る異論を考慮して、一切の注意を思想の説明に向けるであらう。然し汝は喫煙をする汝の中なる批評家は麻酔せられる、そして汝の仕事に取つての邪魔が取除かれてしまふ。煙草で酔はない時に無意義な事に思へたものが、再び重大な事に思はれて來る、漠然としてゐたものが最早やさうでなくなつて來る、姿を現してゐた異論が消失する、そこで諸君は書き續ける、そして一層多く急速に書く。

四

然し葡萄酒や煙草を程よく使用する事から起る些細な麻酔のやうな僅かな——些細な——變化が、重大な結果を生み出す事があり得るであらうか？『若しも人が阿片やハシシユを喫み或はぶつ倒れて感覺を失ふ程酒に酔拂ふならば、勿論その結果はひどいものであらう、然し僅かにホップスや煙草の影響を受けてゐる人には、その結果は確かにひどいものではない』とは、一般に云はれてゐるところのものである。少し許りの麻酔や少し許りの判断力の麻痺は、何等の重大な影響を及ぼさないものであるやうに、人々には見える。然しさう考へる事は、恰も石に打つつけると時計を傷めるかもしらぬがその中に埃りを入れるのは一寸も害にならないと想像するやうなものである。

然し人間の一生に及ぼす主要な仕事は、手や足や又は背でなされる仕事ではなくして、意識によつてなされるものである事を記憶するがよい。足や手で何事かをしようとする人に取つては、先づ或る變化が彼の意識内に起らなければならない。そしてその變化が、人間のそれに基づく一切の運動を規定するものである。而もその變化は常に微妙で又認識し難いものである。

ブリュエローフ(露國の名畫家一七九九——一八五二)が或日一人の弟子の習作を訂正した。その訂正された繪を一目見た弟子は叫んだ、『なぜ貴方は微細な點にしか御觸れにならないのですか、そんなものは全く問題にならぬではありませんか。』ブリュエローフは答へた、『藝術は些細な點から始まるものだ。』

此の言葉は單に藝術に關して丈けではなく、凡ての生活上全く本當の事である。人は眞の生活は、

些細な點の始まるるところから——我等に取つて少く見るところのもの、及び無限に小さい變化の起るところ——初まると云つても差支へがない。眞の生活は大きい外的變化の起るところ——人々が動き廻り、敵對し合ひ、相戦ひ、殺戮し合ふところうでなされるものでない、がそれは唯此等の小さい小さい無限に小さい變化の起るところに於いてのみなされる。

ラスコオリニコフ(ドストエフスキイの小説『罪と罰』の主人公)が眞の生活を生きたのは、老婆及びその妹を殺害した時ではない。かの老婆自身を殺害した時、時特に彼女の妹を害殺した時、彼は眞の生活を生きてゐなかつた、が然しせずにはゐられなかつた事をしながら——長い間籠めて置いた彈丸を發射しながら、機械のやうに行動したのである。一人の老婆は殺された、も一人の女が彼の前に立つた、斧は彼の手中にあつた。

ラスコオリニコフが眞の生活を生きたのは、彼が老婆の妹に逢つた時でなくて、彼がまだ一人の老婆も殺さず、又殺す目的で他人の住居に這入り込みもせず、斧を手にはせず又オバコオトの下に斧を吊す輪を附けなかつた時——彼が少し老婆の事だとか、一人の人間が他の、不必要な有害な人間を地球上から拭ひ去る事は、許さるべき事であるかどうかと云ふ事に就いて考を巡らさずに、ペテルブルグで住むべきであるかどうか、母から金を受け取るべきであるかどうかと云ふ事に就いて、其他老婆に少くも關係のない問題に就いて考を巡らしてゐた時に於いてである。やがて——全く動物的活動とは離れた領域に於いて——老婆を殺さうか殺すまいかの問題が決定された。その問題は——一人の老婆を殺してしまつて、今一人の女の前に斧を手にして立つた時に於いてではなく——何もしてゐない時

で唯物を考へて居た時に於いてとあつた、唯彼の意識が活動して居て、そしてその意識の中で、小さい小さい變化が行はれつゝあつた時に於いてとあつた。人が起つて来た問題を明瞭に決定するために最大の明徹さを要するは、斯様な時に於いてとある、そして一杯の麥酒或は一本の巻煙草が、問題の解決を沮害し、その決定を延ばしめ、良心の聲を抑止し、劣等な動物的な本性のためを計るために問題の解決を急ぐのは——ラスコオリニコフの場合のやうに——斯る時に於いてとある。

小さい小さい變化である——然しその變化に、最も大きい最も恐るべき結果が依存してゐるのである。人が決心を固めて行動を始める時に生ずるところのものからして、多くの物質的な變化が結果する、家や財産や人間の肉體は亡ぶであらう、然し人間の意識内に隠されてゐるところのものよりも、より一層重大な事柄は、何も起り得ない。起り得るものゝ限界となるものは、意識である。

然し極く微細な意識の領内で起る變化から、想像する事の出来ない重大な、無際限な結果が伴ひ起るものである。

私が今説いてゐるところのものは、何か自由意志或は決定論と關係あるやうに、推察しないやうにして貰ひ度い。その問題に就いての論議は、私の目的とするものに取つても、或は此の事柄に就いて他の人にとつても不用な事である。私は、人は彼の欲する通りに行動し得るか否かと云ふ問題（私の考へに依ると、此れは正確に述べられた問題ではない）を解決せずに、唯人間の活動は無限に小さい意識の變化に依つて左右されるものであるが故に、（我等が自由意志の存在を認める認めないに關係なく）その結果として、我等は、丁度人が品物の重さを秤るべき秤器に注意を拂はなければならぬ

と同じやうに、此等の微細な變化の起る状態に、特別な注意を拂はなければならぬと云ふのである。我等は出來得る、限り自ら及び他人を良心の正しい作用のために必要な思想の明徹と緻密とを破壊しないやうな状態に、置くやうにしなければならぬ。そして麻酔品を使用して良心の働きを妨げたり混亂せしめたりしながら、その反對の態度で行動してはならない。

何故なれば、人は精神的存在であると共に動物的存在であるからである。人は、丁度時計が、その針によつて動す事も重なる歯車に依つて動かされる事と同様に、精神的本性に影響を與へるものに依つて動かされるもすれば、動物的本性に影響を與へるものに依つて動かされる事も出来る。そして恰もその内部の機械仕掛に依つて時計の運行を調整するのが最もいゝ事であるのと同じやうに、又人も——一人の自我——その意識に依つて最もよく調整されるものである。そして時計に於けると同様に、人はそれを以つて最もよく内部の機械を最もよく動かして得るそのものに特別な注意を拂はなければならぬやうに、人に於いても亦、特に意識の明快と云ふ事だけに注意を拂はなければならぬ。即ち意識は全人間を最もよく動かして得るものである。此れを疑ふ事は不可能である、人は誰でもそれを知つてゐる。然し自己自らを偽る必要が起つて来る。人々は、自分のする事を正しく見せようと氣づかう位には、意識が正確に働かねばならぬと云ふ事に心を使はない、そして彼等は知りつゝ彼等の意識の適當な働きを沮害する材料を使用してゐる。

人々は偶然にでもなく、又懶惰からでもなく、自分に元氣をつけようとしてとてどもなく、又愉快な事だからと云ふのでもなしに、唯自分の衷の良心の聲を眩ますために酒を飲み又煙草を喫ふ。そして若しもそれが本當であるならば、その結果は非常に恐るべきものであるに相違ない！ 實際、壁を垂直にするために錘規を使はず、又部屋の隅々を正確にするために三角定規にせず、壁の如何なる凹凸にも當て嵌まる柔い錘規を用ひ、鋭鈍いづれの角にも當て嵌まる定規を用ひた人々の建てた建物

がどんなものであるかを考へて見るがいゝ。
だが、自己麻酔に感謝すべき事であるが、それと丁度同じ事が、生活に於いてなされつゝある。生活は良心と一致しない、そこで良心は生活に適合するやうに曲けられる。

此れは個人の生活に於いてなされると共に、又個人の生活から成り立つてゐる全體としての人類の生活に於いてもなされてゐるところのものである。

斯様な人間の意識を麻酔さす事の充分な意義を理解せんには、各人をして生涯の各時期に通つて来たその精神上的の状態を注意深く、回顧せしめるがいゝ。各人は彼の生涯の各時期に、或る道徳上の問題が襲つて来て、それを彼が解決しなければならぬし、又その解決は彼の一生の幸福に關係するものである事を見出すであらう。斯様な問題を解決するためには、大きな注意力の集注が必要である。斯様な注意力の集注は骨折である。各骨折に於いて特にその手始めに際しては、仕事に困難で又苦痛であるやうに見える、そして人間の弱點がそれを放棄する欲望を呼び起さす時があるものである。肉體上の仕事は最初苦痛のやうに見える、更らに心の上の仕事はそれ以上に苦痛に見える。レッシングが

云つたやうに、人々は考へる事が困難になり始めた個所で考へる事を止める傾向がある、然し私は、正にそこに於いて考へが始めて物になり始める時であると附加へやう。人は彼を悩ます問題を解決するためには、努力——屢々苦痛な努力——が必要であるやうに感ずる。そして此れを塗り消してしまはうと欲する。若しも彼が彼の諸の能力を麻酔せしめる方法を有してゐないならば、彼は彼を悩ます問題を彼の意識から削除する事が出来ないであらう、そしてそれを解決すべき必要が彼にのし掛つて来るであらう。然し人は、此等の問題が現れて来る時は何時でも、それを追ひ拂ふべき方法のある事を發見する——そして彼はそれを使用する。解決を期待する問題が彼を悩まし始めるや否や、彼は此れらの方法に逃げ場を求め、そして煩はしい問題の惹き起す不安を避ける。意識はそれらの解決を要求する事を中止する、そしてその未解決の問題は次ぎの覺醒の時迄その儘未解決のまゝで残る。然しその時が来ると同じ事が繰返へされる、そして人は數個月間數年間、又はその一生の間でも、此等の同じ道徳上の問題の前で、一步もその解決の歩を進める事なしにその儘である。而も道徳上の問題の解決のうちこそ、生活の全運行が存在するのである。

その有様は、恰も貴重な眞珠を得るために或泥水の底を見る必要のある人が、水に入るのを嫌つて澄んで澄明になる度にその水を掻き立てるのに似てゐる。多くの人々は一生の長い間、同じ一度受入れた漠然とした矛盾の人生觀に——覺醒の時期が近づく度に、常に彼が十年又は二十年前に打つつかつて、そして故意にそれを突き破る事の出来る思想の尖端を鈍らすが故に打ち破る事の出来ない同一の壁に身を打ち寄せて——動かすその儘で居残つてゐる。

各人をして彼が酒を飲み又煙草を喫んだ數年間の彼自身を追憶せしめよ、又彼をして他の人々に就いての經驗中の事を檢べしめよ、然る時各人は皆麻酔品に溺れてゐる人とそれから自由な人との間に、一定の劃然たる區別の線のあるを見るであらう。人が自らを麻酔せしめればせしめるだけ、道徳的に無感覺になるものである。

六

阿片やハシユの個人の上に及ぼす結果は、我等に明示されてゐるやうに、恐るべきものである、我等が知つてゐるやうに、アルコールの飲酒家に與へる結果は恐ろしい、然し無害であると考へられてゐるもの、そして大多數の人々特に教育ある人々を溺れさせてゐるもの、即ち酒精や葡萄酒や麥酒、又は煙草の適度の使用の、我等の全社會に及ぼす結果は、更に比較にならぬ位に一層恐るべきものである。

社會の指導的活動——政治上の、官廳の、科學文學、及び藝術上の活動が——大部分變態の状態にある人々、醉拂つてゐる人々に依つて行はれてゐると云ふ事實を容認せば、そしてそれは容認されねばならぬ事柄であるが、その結果は自然恐るべきものであるに相違ない。

多くの現代の富裕な人々のやうに、食事の度毎にアルコール性の飲料を飲んで、ある人はその翌日仕事をしてゐる時間の間は、完全に常態で又眞面目であると云ふ事は、一般に考へられてゐる事柄である。然しそれは全然の誤謬である。一瓶の葡萄酒一杯の酒精、又は三杯の麥酒を昨日飲んだ人は

今日は昂奮の結果として起る睡氣と氣鬱の状態にある、そしてそれがために喫煙に依つて増大される氣脱げの状態にある。習慣的に喫煙し又は適度に酒を飲む人が頭腦を平常の状態に恢復するためには少くとも一週間又はそれ以上の酒及び煙草の節制を要するものである。然しそれは起つたためしのない事柄である。

故に我等の間に行はれるとしての多くのものは、それが他人を司配し又は教育する人々に依つてなされようとも、又は司配され教育される人々に依つてなされようとも、それをなす人が素面でない時になされてゐるのである。

そして此の事は冗談とも誇大の言とも考へないでほしい、我等生活の混亂、わけてもその暗愚な事は、主として多くの人々が生活してゐる絶え間なき酩酊状態から起るものである。果して酒を飲まない人々は、我等の周圍に行はれてゐる凡ての事柄——エツフェル塔の建築から兵役に服する事に至る迄——をなす事が出来るであらうか？

何等の必要もなしに會合が催される、資金が集められる、人々が働く、計算をする、圖面を引く、勞働すべき數百萬の日數と數千噸の鐵とが、一つの塔を立てるために消費される、そして數百萬の人々は、その上に登つて、一寸の間その上に立ち止つて、それから再び降りる事を義務のやうに考へて居る。まして此の塔を建て又それに登る事は、今一つの更に此れよりも大きい塔を他の場所で建てやうとする考以外何も呼び起しはしをい。果して素面の人はそんな事が出来るであらうか？ 或は今一つの例を取つて見よう。凡ての殿羅巴人は數十年の間、人を殺す最も良い方法を案出する事に忙しく

又出来るだけ多くの人々に、彼等が成年に達するや否や、殺人の方法を教へる事に忙しかつた。各人は決して野蠻人の侵入のない事を知つて居る、然し此等の開化して基督教の諸國民のなす準備は、各自相互の間に向けられてゐるものである事を知つてゐる、各人は、此の事が重荷であり、苦痛であり不便で破滅的で不道徳的で敬虔な事で、又癪に觸る事であることを知つてゐる——然し凡ての者は相變らず相互間の殺戮の準備をしてゐる。或者は如何なる同盟國と共に、誰を殺すべきかと云ふ事を決定するために、政治上の結合を案出する、他の者は殺人の方法を教へられつゝある者を指揮する、そして今一つ他の者は、再び——彼等の意志に反し、良心に反し、理性に反して——此等の殺人の準備に身を任せる、素面の者は果して斯様な事柄が出来るであらうか？ 未だ一度も眞面目な氣持になつた事のない酒呑のみが只かうした事柄をなし、又單に此の點に於いてのみならず他のあらゆる方面に於いて我等の社會の人々が生活しつゝあるから、生活と良心との間の恐ろしき不調和の状態にあつて、生活を續ける事が出来る許りである。

以前未だ一度も、私が考へるのに、人々は斯くまで明らかに彼等の行爲と相反せる良心の要求の下に生活した事はなかつた。

今日人類はいはゞ、固く棒立ちになつてしまつたやうなものである。それは恰も、或外的な原因が自然にその知覺と一致した位地を取る事を妨げてゐる感がある。そしてその原因——たとへ唯一のものでないとしても最大のものである——は、酒や煙草に依つて我等の社會の大多數の人々が、自を任せてゐる者の肉體上の麻酔状態である。

此の恐るべき弊害からの解放は、人類の生活上に一新紀元を劃するであらう、そしてその紀元は手近かにあるやうに思はれる。弊害は認められてゐる。一つの變化は既に、麻酔品を使用する事に關する我等の知覺の中に起つてゐる。吾々は此等の品の恐ろしい害悪を理解した、そしてそれらを摘出しよと始めてゐる、そして此の殆んど認め難い知覺内の變化は、必然的に人類を麻酔品の使用より解放するであらう——彼等の眼をその良心の要求に向つて開かしめるであらう、そして彼等は彼等の生活を意識と一致して整頓し始めるであらう。

そしてこの事は既に始まりつゝあるやうに思はれる。然し常にさうであるやうに、凡ての下層階級が既にそれに浸潤してしまつた後に初めて、上流階級の間にも初まりつゝあるものである。(千八百九十年・露曆五月一〇日)

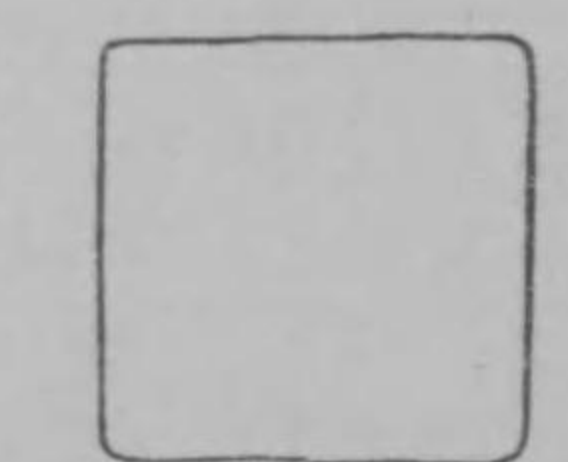
然し飲酒も喫煙もしない人々が、屢次酒を飲み煙草を喫ふ人々よりも比較にならぬ位道徳的に低い地位にゐるのは、どうしてあるか？ 又飲酒喫煙をする人々が、屢次心の上にも又道徳上にも最も高い資質を現はす事のあるのは、何故であるか？

その答は第一、我等は飲酒喫煙をする人々が、飲酒喫煙をしない場合に到達する高所を知らない。又第二に、道徳天賦の高い人々は、麻酔品の悪化にも拘はらず、偉大な事をし遂げると云ふ事實からして、我等は唯單に、彼等が若し自身を麻酔せしめなかつたならば、尙一層偉大な事柄をしたであらうと云ふ事を結論し得る丈けである。一友が私に話したやうに、若しもカントがあんなに多く喫煙をしなかつたならば、彼の作品は、こんな奇妙に又よくない、形式の下には書かれはしなかつたらうと云ふ事は、如何にもさうでありさう

な事である。最後に、人間の心的並び道徳的標準が低ければ低い丈、それだけ彼の良心と生活との間の矛盾を感じる事も少い、又それがために、自身を麻酔せしめようとする欲望を感じる事も少い。そしてその一方同じ理由で、最も敏感な性質の人々——生活と意識間の矛盾を素速く又病的に感ずる人々——が屢次麻酔性のものに溺れて、それに依つて死ぬ事のある理由をも説明する事が出来る。(トルストイ)

大正十二年十月二十五日 印刷
大正十二年十一月二十日 發行

定價金四拾五錢



菜食論と禁酒論

著者	神田 豊穂
發行者	神田 豊穂
印刷者	寺田 國太郎
印刷所	早稻田印刷株式會社

發行所
東京市神田區表神保町十番地
株式會社 春秋社

電話東京二四八六一番
電話神田二一三八番

トスルト名著名集

石田三治譯	茶食論と禁酒論	假四六版	定價金四拾五錢
高谷道男譯	簡易聖書	假四六版	定價金八拾錢
福永挽歌譯	家庭の幸福	假四六版	定價金七拾五錢
加藤一夫譯	我等何を爲すべき乎	假四六版	定價金壹圓八拾錢
柳田泉譯	十二月黨員	假四六版	定價金八拾錢
加藤一夫譯	子供の智慧	假四六版	定價金四拾五錢
春秋社譯	民話	假四六版	定價金八拾錢

西田天香著 一燈園叢書

西田天香著

（好評百五拾五版）

懺悔の生活

四六版四百三十頁
背布函入堅牢美本
コロタイプ版二葉
定價金貳圓三拾錢
送料金拾四錢

▽一絲響を發して萬管これに和す。本書を讀みて断然家業を廢止したる娼家の主人あり。虚飾の生きたる娼家の十字街頭の群に入活る少女あり。鹿ヶ谷一燈園は新來の求道者にて充滿す。靈界嚮導の光永に滅したりと言ふ乎。書架に一卷の本あり。仲隔たれる夫婦も相親しむ。此の世乍らの天國淨土、家庭の中に實現されん。

▽洛外鹿ヶ谷に襦袢帯の一團あり、名けて一燈園と云ふ。同人は一物半銭を所有せず、常に懺悔の心を持って十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞す。その間主を西田天香氏となす。
▽天香氏とは何人ぞ。嘗つて倉田百三氏の名作『出家とその弟子』が一世の讀書界を動かしし時、一部の人士は作中の親鸞と唯圓とを目して、暗に天香師の心の兩面を材としたるものと噂し合へり。吾人は茲にその當否を断ぜず、只、倉田氏が西田師に私淑する事日久しきを言へば足る。
▽網島梁川氏は十數年前豫言して言へり。世は自らにして西田氏を知るの機あらんと。本書は西田氏を初め一燈園同人の行事逸話等を紹介批評せる一個の新らしき使徒行傳也。

CDHK ち 2/365

トルストイ名著名集

トルストイの思想を全世界に流布せしめしに就いては、フリー・エージ・プレスのは、茲に江湖の熱帯に促されて該全集中の名篇を選出し、茲に極めて簡素低廉の小冊子として頒布す。……『簡易聖書』以下『民話』まで未刊

宮島新三郎譯 **人生論** 假綴(定價) 金八拾錢 (送料) 金八錢

木村 毅譯 **藝術とは何ぞや** 假綴(定價) 金壹圓 (送料) 金拾錢

細田源吉譯 **私の懺悔** 假綴(定價) 金四拾五錢 (送料) 金八錢

加藤一夫譯 **宗教とは何ぞや** 假綴(定價) 金七拾錢 (送料) 金八錢

加藤一夫譯 **我が宗教** 假綴(定價) 金壹圓貳拾錢 (送料) 金拾錢

加藤一夫譯 **カザック** 假綴(定價) 金壹圓五拾錢 (送料) 金拾貳錢

終

